

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第35集



1996

宇治市教育委員会

序

近年、宇治市では、宅地開発やマンション建設が急増しており、それに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加しています。

本書は平成7年度に実施しました開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査と立会調査計6件の概要をまとめたものです。

調査成果の概要は後述するとおりですが、西浦遺跡での「和同開珎」の出土や宇治神社遺跡での庭園遺構の発見等、数多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史解明に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた開発業者の方々を始め、調査期間中に御協力・御指導賜りました関係各位に対して心よりお礼申し上げます。

平成8年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩 本 昭 造

例 言

- 1、本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第35集である。
- 2、本書が収録する遺跡は、平成7年度に本市教育委員会が開発事業に伴い実施した発掘調査と立会調査計6件である。
- 3、本発掘調査事業に関係する機関・体制は下記のとおりである。

| | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|-----------|------|
| 発掘主体者 | 宇治市教育委員会 | | | |
| 発掘責任者 | 宇治市教育委員会 | 教育長 | | 岩本昭造 |
| 発掘担当者 | 同 | 社会教育課 | 文化財保護係 主事 | 荒川史 |
| | 同 | | | 浜中邦弘 |
| | 同 | | 嘱託 | 吹田直子 |
| 発掘事務局 | 宇治市教育委員会 | 参事 | | 池田正彦 |
| | 同 | 社会教育課 | 課長 | 細川芳朗 |
| | 同 | 社会教育課 | 文化財保護係長 | 吉水利明 |
| | 同 | 社会教育課 | 主任 | 日原洋子 |
| 調査参加者 | 宮崎一弥、新井朋也、時実奈歩、河村亜由美、久保千恵子、畑陽子、山下由香 | | | |

収録発掘調査一覧表

| | 名 称 | 調 査 地 | 調 査 原 因 | 経 費 負 担 者 | 調 査 期 間 | 調 査 面 積 |
|---|---------|---------------|---------|-------------------|----------|---------|
| A | 西 浦 遺 跡 | 木幡西浦 2-1他 | 共同住宅建設 | ナショナル エステート(株) | H7. 4~ 6 | 800㎡ |
| B | 三室戸子寺院跡 | 菟道奥ノ池 13-1 | 宅 地 造 成 | 小 林 寿太郎 | H7. 6~ 7 | 180㎡ |
| C | 下 居 遺 跡 | 宇治下居72他 | 共同住宅建設 | 東 洋 産 業 (株) | H7.11~12 | 422㎡ |
| D | 宇治神社遺跡 | 宇治又振37他 | 宅 地 造 成 | 通 円 亮太郎 | H7. 6~ 7 | 12㎡ |
| E | 西牟上り遺跡 | 菟道藪里26他 | 宅 地 造 成 | 奥田建設工業(株) | H7. 7~ 8 | 566㎡ |
| F | 宇治陵隣接地 | 木幡南山 66・71 | 宅 地 造 成 | 北 斗 産 業 | H7. 5 | 108㎡ |

4、本書の執筆は下記のとおりである。

A. 西浦遺跡

I・II・III・IV・V・VI……………浜中邦弘

V……………河村亜由美（同志社大学学生）

B. 三室戸寺子院跡……………吹田直子

C. 下居遺跡

I・II・IV……………荒川史

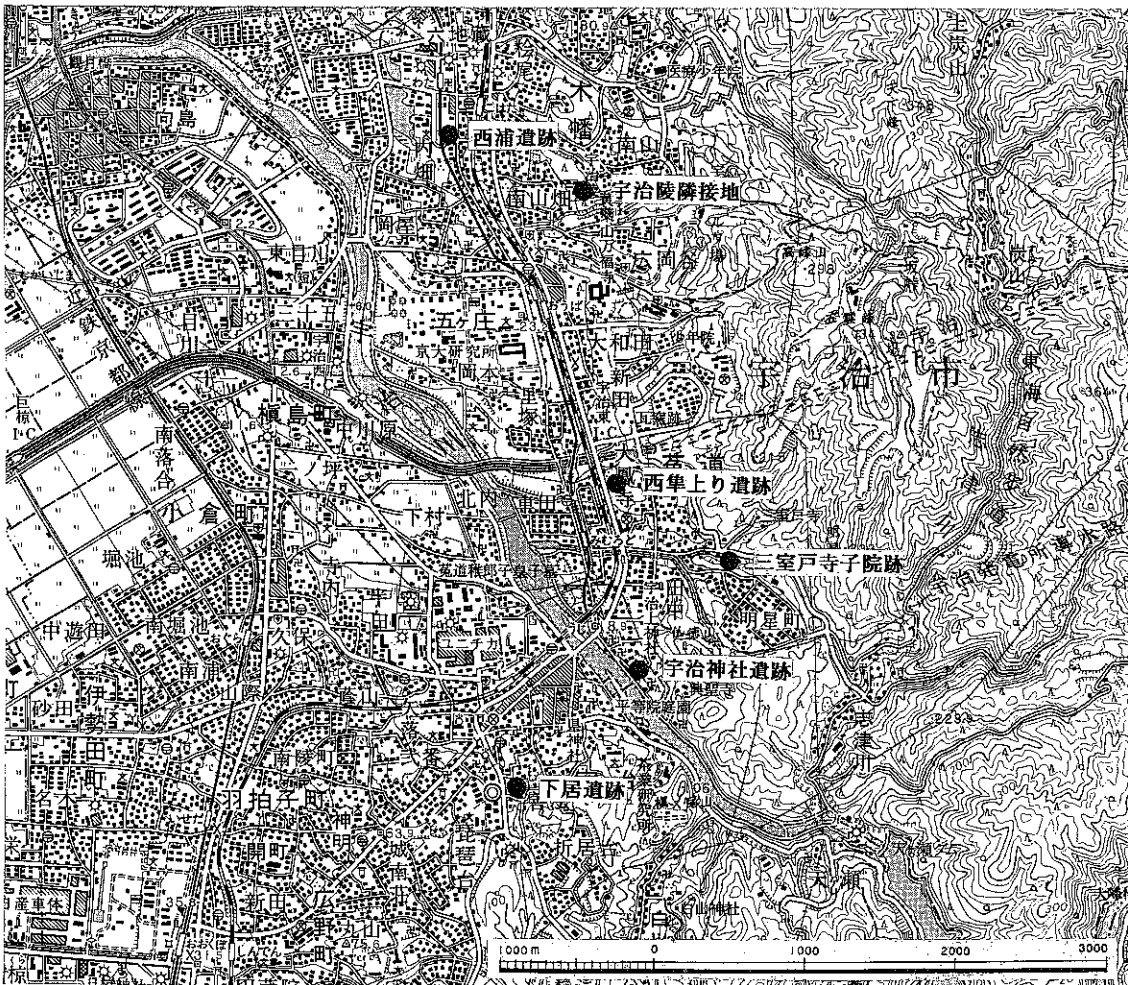
III……………浜中

D. 宇治神社遺跡……………浜中

E. 西隼上り遺跡……………浜中

F. 宇治陵隣接地……………浜中

5、本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課文化財保護係が行い、編集実務を浜中が担当した。



発掘調査地位位置図

本文目次

A. 西浦遺跡発掘調査概要

| | |
|------------------|----|
| I. はじめに | 1 |
| II. 位置と環境 | 2 |
| III. 調査の経過 | 3 |
| IV. 検出遺構 | 5 |
| V. 出土遺物 | 20 |
| VI. まとめ | 28 |

B. 三室戸寺子院跡発掘調査概要

| | |
|-----------------|----|
| I. はじめに | 31 |
| II. 位置と環境 | 32 |
| III. 検出遺構 | 36 |
| IV. 出土遺物 | 41 |
| V. まとめ | 43 |

C. 下居遺跡発掘調査概要

| | |
|-----------------|----|
| I. はじめに | 45 |
| II. 検出遺構 | 48 |
| III. 出土遺物 | 53 |
| IV. まとめ | 57 |

D. 宇治神社遺跡発掘調査概要

| | |
|-----------------|----|
| I. はじめに | 59 |
| II. 位置と環境 | 60 |
| III. 検出遺構 | 63 |
| IV. まとめ | 67 |

E. 西隼上り遺跡発掘調査概要

| | |
|-----------------|----|
| I. はじめに | 71 |
| II. 調査の概要 | 72 |
| III. まとめ | 75 |

F. 宇治陵隣接地立会調査概要

| | |
|-----------------|----|
| I. はじめに | 77 |
| II. 調査の概要 | 78 |
| III. まとめ | 80 |

| | |
|-----------|----|
| 抄 録 | 81 |
|-----------|----|

A. 西浦遺跡発掘調査概要

(木幡西浦 2 - 1 他)

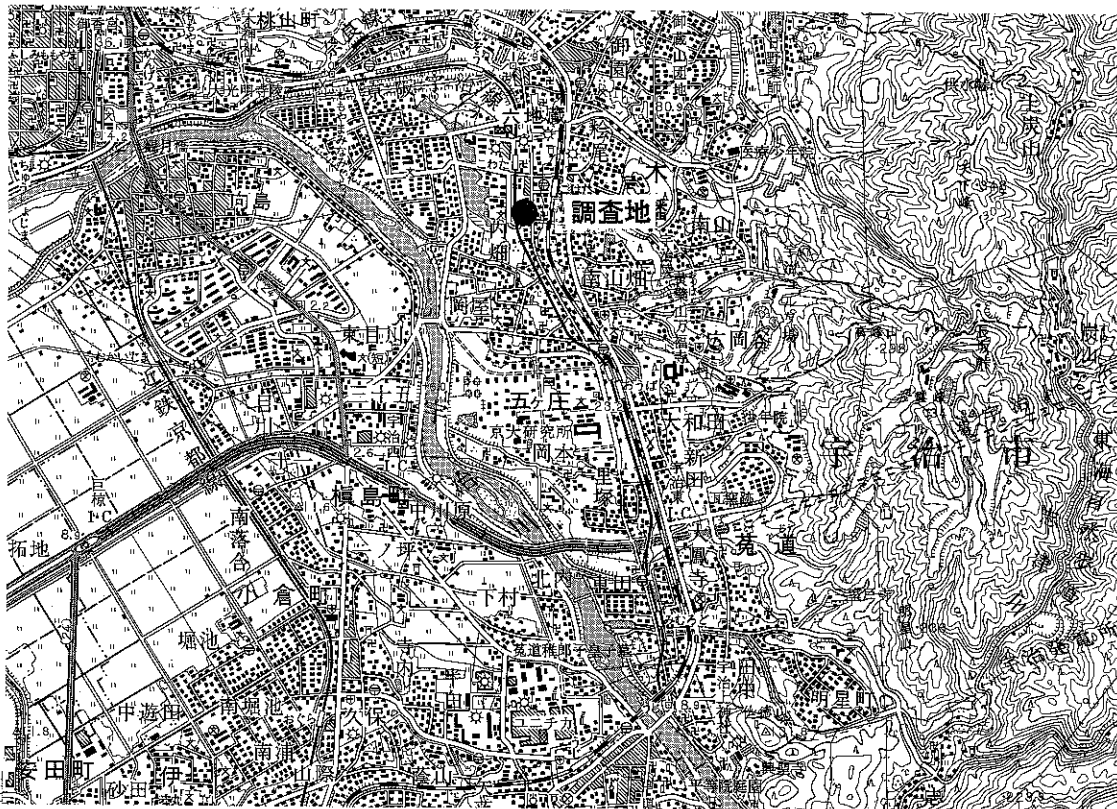
I. はじめに

本書は、宇治市教育委員会が宇治市木幡西浦2-1他において計画されたマンション建設に先だって実施した、西浦遺跡発掘調査の成果概要である。

西浦遺跡は宇治市東部北端、木幡と旧奈良街道（山背道）に挟まれた平地部に展開する遺跡で、現在の木幡の町並の南端に位置する。

西浦遺跡の所在する木幡は、古くは『日本書紀』・『古事記』や『万葉集』にみられるところで、平安時代には藤原氏歴代の墓や藤原氏の寺院・別業が建てられたように、藤原氏との関連の強い地域である。西浦遺跡の発掘調査はこれまで3回実施しており、古墳時代～近世の各時代にわたる遺構・遺物が確認され、中でも3次調査の中世期における遺構・遺物には注目すべきものがあった。

今回の調査地はこれまでの中で最も街道沿いに位置する。さらに道を挟んで東側には不焼地蔵として有名な鎌倉期の地蔵菩薩像（第3図）を安置する能化院があることから、中世期の遺構検出を想定して、発掘調査を開始した。



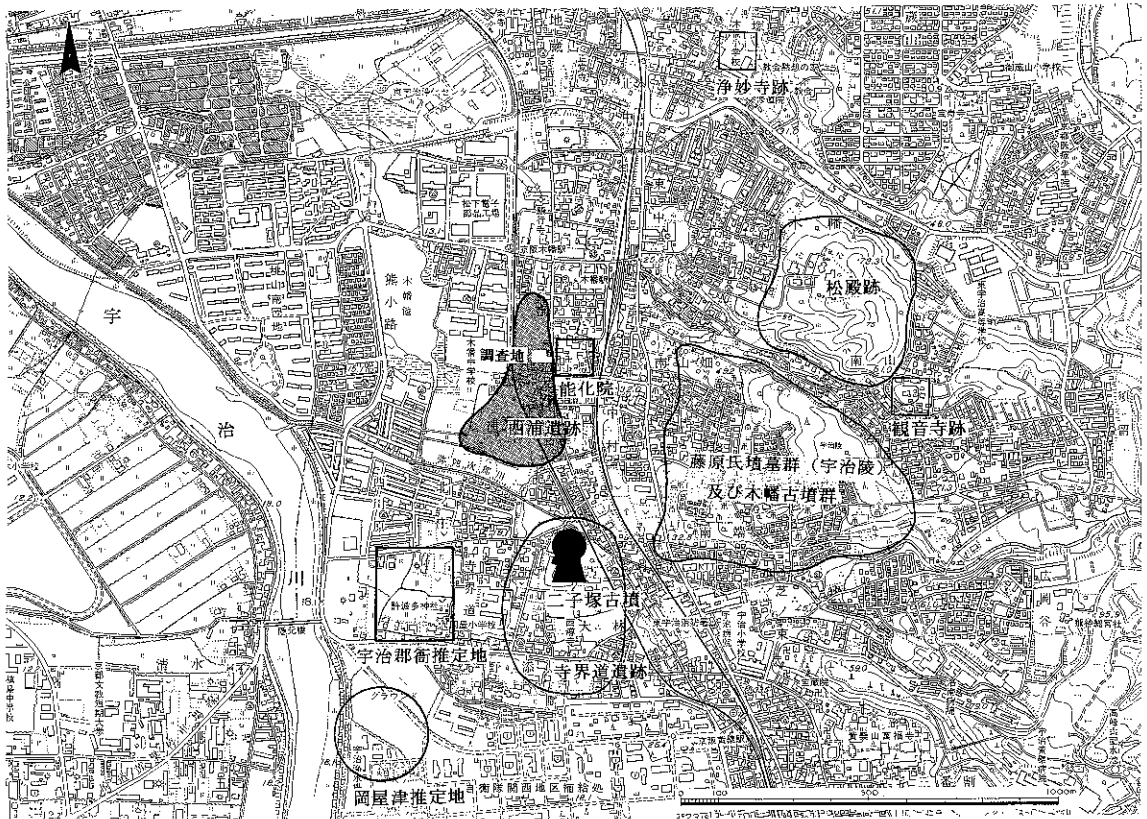
第1図 調査地の位置図（1:50,000）

Ⅱ. 位置と環境

A. 地理的環境

西浦遺跡（第2図）は、宇治市東部北端、木幡池と旧奈良街道に挟まれた細長い平坦部に位置し、現在の木幡中心部南端に位置する。

本遺跡東側には、調査地に向かって緩傾斜する丘陵が奈良街道付近まで続く。西側は織豊期、時の関白豊臣秀吉によって宇治川の付け替えが行われ、現在はそれ以前の景観を窺うことはできないが、付け替え前は巨椋池の岸辺が調査地付近にきていたと想定されている。このことから、調査地の位置する細長い平坦地はさらに狭かったといえる。西浦遺跡の西側一帯に広がる木幡池は、巨椋池の東北端部の名残として考えられているが、直接の成因は、宇治川堤後背の湿地に山科川などが流入してできたものらしい。現在遺跡の南側には弥陀次郎川が流れているが、近世初期までは調査地の南微高地の上の二子塚古墳のさらに南を流れ、隠元橋付近で宇治川と合流していたことが『五ヶ庄絵図』（陽明文庫蔵）等から窺うことができる。近世以降、この周辺の土地利用は大半が茶畑として利用され、特に「西浦」は優良な茶園として有名だったようである。



第2図 西浦遺跡と周辺の主要遺跡

B. 歴史的環境

西浦遺跡周辺は、宇治市内において遺跡の密集する地域の1つである。特に古墳時代・平安時代には目を見張るものがある。

調査地周辺は早くから人々が住み始めていたようで、旧石器時代の黒曜石製のナイフ形石器が二子塚古墳の盛土から見つかっている。宇治では最古の先人の足跡である。縄文時代では二子塚古墳の盛土や古墳南の寺界道遺跡から後・晩期の土器や貯蔵穴が見つかっている。

弥生時代は明らかではないが、古墳時代後期になると調査地南側の微高地上に全長112 mに及ぶ南山城最大の前方後円墳である二子塚古墳が突如この地に造営されるとともに、東側の木幡山丘陵に約120基に及ぶ木幡古墳群が形成される。

平安時代になると、藤原基経以降、木幡山が藤原氏の墓所として形成され、さらにこれら藤原氏の墓群を弔うために、藤原道長によって浄妙寺が創建される。平家物語で有名な「殿下騎合」の事件にみえる摂政藤原基房もその晩年を木幡に造営した松殿で過ごしている。

中世には木幡観音寺や能化院等数多くの寺院が造営された。

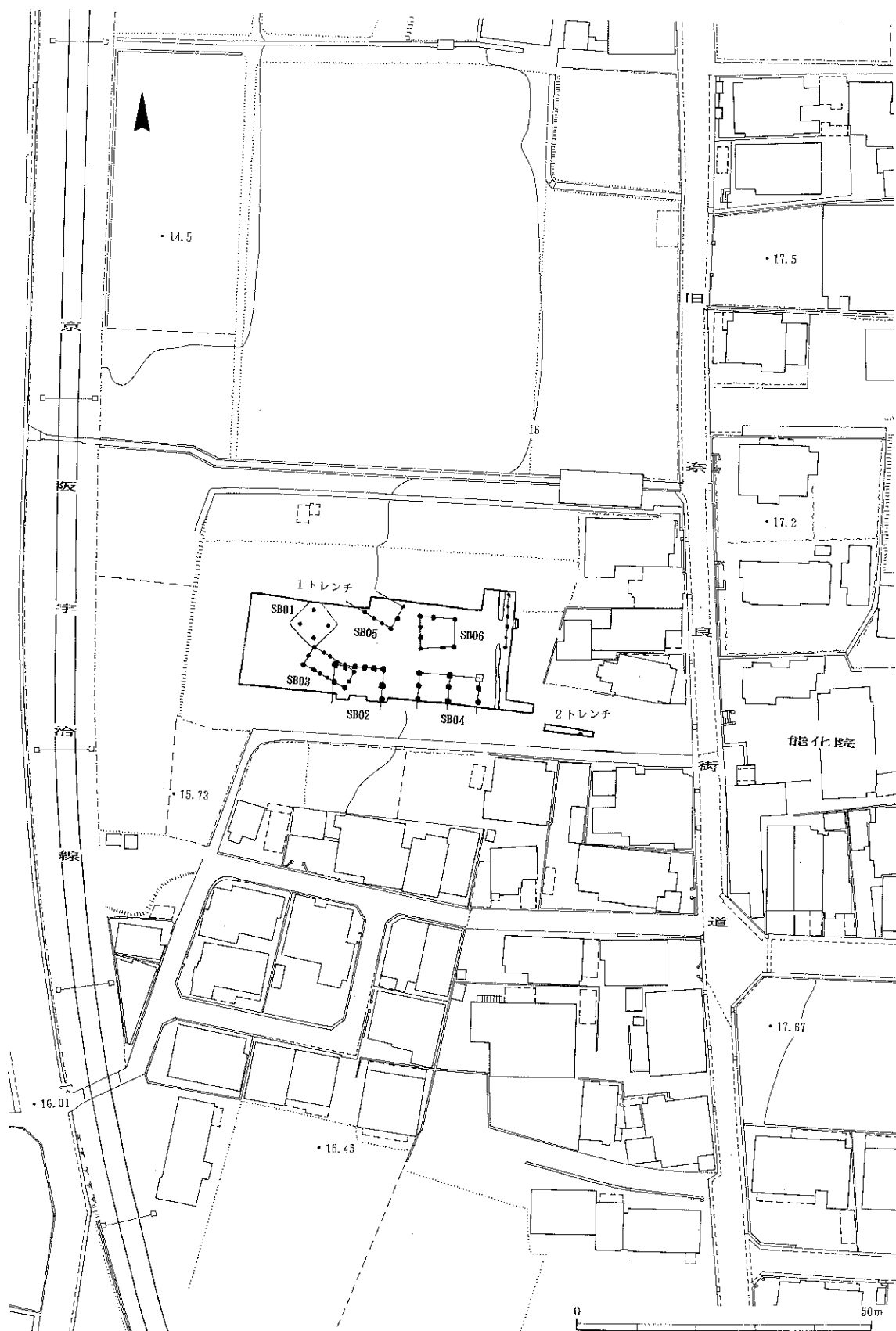
Ⅲ. 調査の経過

今回調査地は、発掘調査開始前はアスファルト舗装された駐車場であった。

発掘調査は、4月3日にまず重機で調査区北側に細長いトレンチをいれて遺構の確認を実施するも、遺構がみられなかったため、そこにプレハブと掘削土処理場を設定した。4月4日に調査区南側にトレンチの設定と重機によるアスファルト排除作業を開始した。重機でアスファルトを除去後、その直下で茶畑の土を検出、さらに掘り下げたところ、地表下約1.5mにて柱穴状の遺構を確認、遺構面と判断し、調査を進めた。遺構検出はもっぱら人力によって行った。完掘段階頃にトレンチの図面作成、写真撮影等を行った。最後に埋め戻しを行い6月30日に終了した。調査面積は800㎡。



第3図 不焼地藏（能化院蔵）



第4図 調査地周辺の地形図 (1 : 5,000)

IV. 検 出 遺 構

今回の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居1棟、掘立柱建物4棟・埋納遺構2・板塀跡・土壇がある。時期的には古墳時代後期から織豊期までに及ぶ。

A. 1 トレンチ

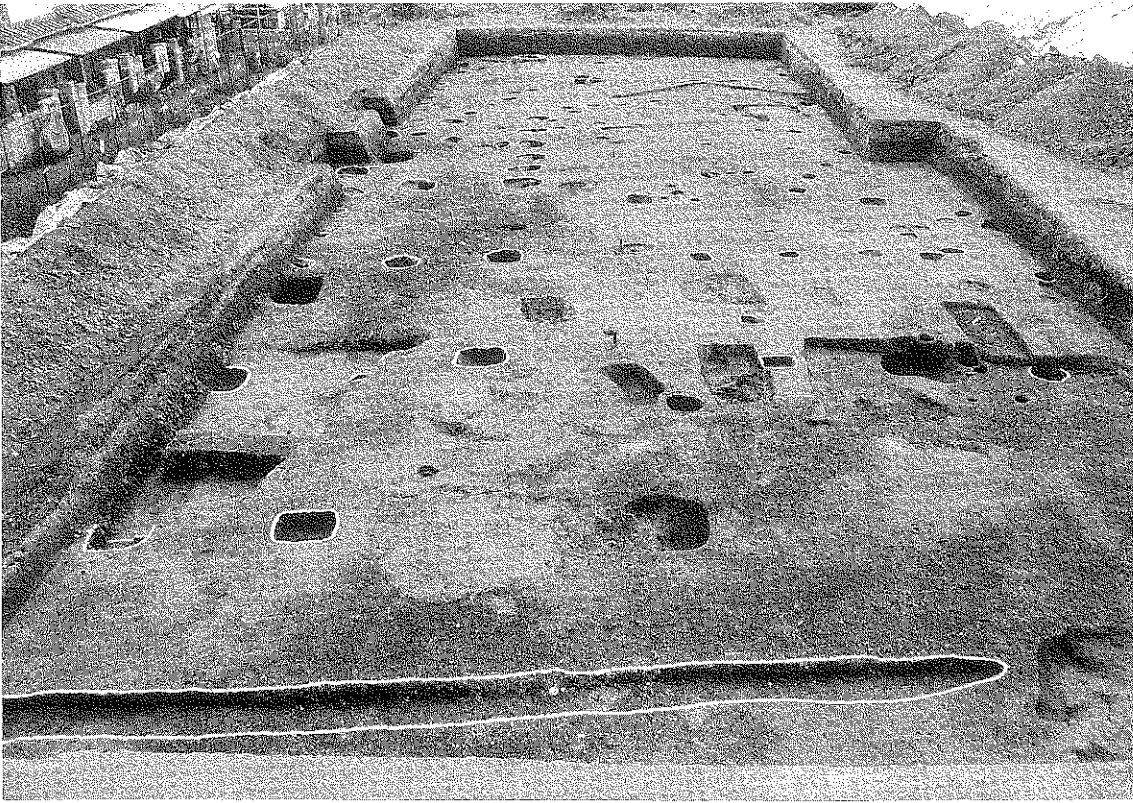
土層の状況 調査地の地表面は、東から西に向かって緩やかに傾斜しており、調査地東端と西端との比高差は0.7m程ある。周囲の地形状況等から、調査地は地形の改変をそれほど被っていないと考えられた。その想定どおりに、遺構面は東から西に緩傾斜していた。標高はトレンチ東端で15.8m、西端で14.8mを測る。現地表面からは約0.9～1m程下に位置する。まず地表面から層位順に、トレンチ南壁での土層の状況を中心として述べていく。まず地表面から約0.4mまでは駐車場の基盤面が続き、その下層に厚さ0.3m程に堆積した茶畑の耕土層がみられた。遺構・遺物はこの時点ではほとんどなかった。さらに掘り下げると約0.2mのトレンチ全体を覆う黒褐色土層を確認し、この層中に古墳から中世期にかけての遺物が散在していた。この面上で遺構確認を行ったが、顕著に遺構がみられなかった。さらに掘り下げ、黒褐色土層下の黄褐色土層で柱穴痕が確認できたため、この土層上で遺構確認を行った。しかしながら遺構面の基盤土は、土層断面から黄褐色土層の上層の黒褐色土層と判断された。トレンチ西端を断ち割り、下層の堆積状況の確認を行った。小規模な面積の確認であり、判断根拠に乏しいが、遺物の出土は全くなく、さらにこの黄褐色土層が厚く堆積していることからこの層が地山層であると判断した。

竪穴住居SB01 トレンチ北部で検出した一辺が約5.9mを有する方形の竪穴住居跡であり、通常の住居跡よりやや大きい。遺構面上で住居跡の輪郭を明瞭に確認した。残っていた壁の高さは20cm程で決して残りは良くない。建物全体を支える4本の支柱穴の掘方を確認した。柱掘方は直径約40cm～50cmの円形を呈する。貼床、壁溝等の住居跡に伴う施設は確認できなかった。住居跡西壁ほぼ中央部において、焼土・炭が比較的まとまって出土しており、作り付けのカマドの存在がここに想定される。床面からの出土遺物がないが、住居跡埋土から土師器の甕片等とともに古墳時代後期の須恵器の甕・杯が出土した。また支柱穴内に古墳時代後期の甕片が含まれていた。このことから、この住居跡は古墳時代後期に廃絶した可能性が高いといえる。

掘立柱建物SB03 トレンチ中央南よりで検出した4間(7.2m)×2間(3.2～3.5m)の掘立柱建物。柱間は掘方中心部を目安にして計測すれば、桁行1.8m、梁間1.7～2mとなる。柱掘方は直径70cm程の円形状を呈する。柱穴は確認できなかった。掘方埋土から土器が若干



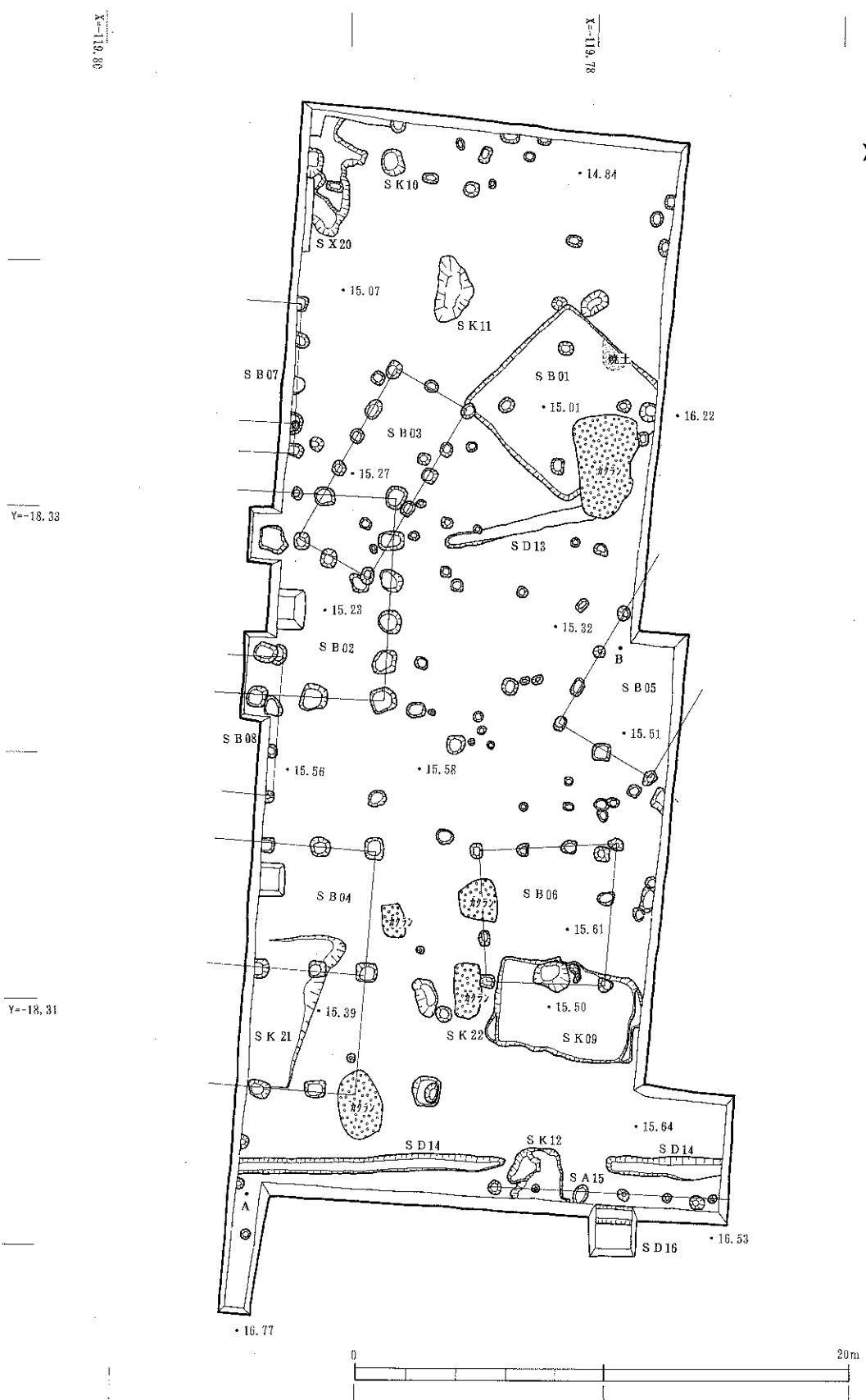
第5図 調査地上空写真（上が東）



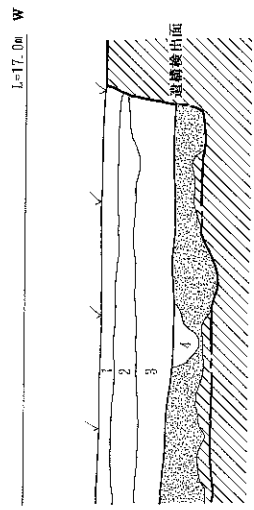
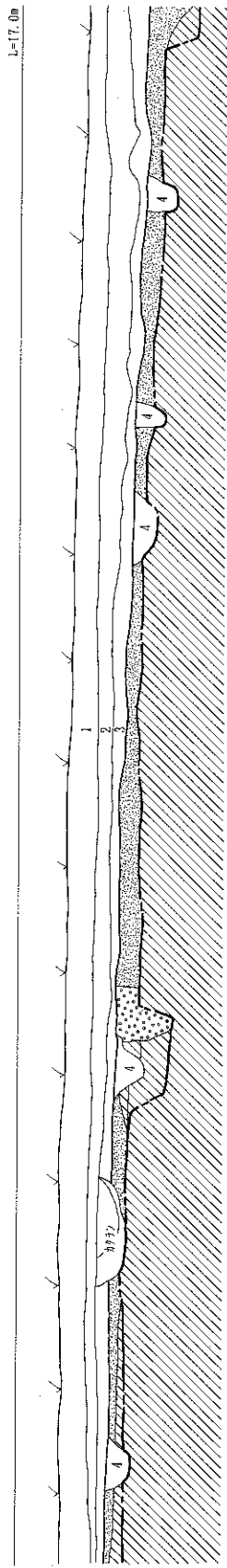
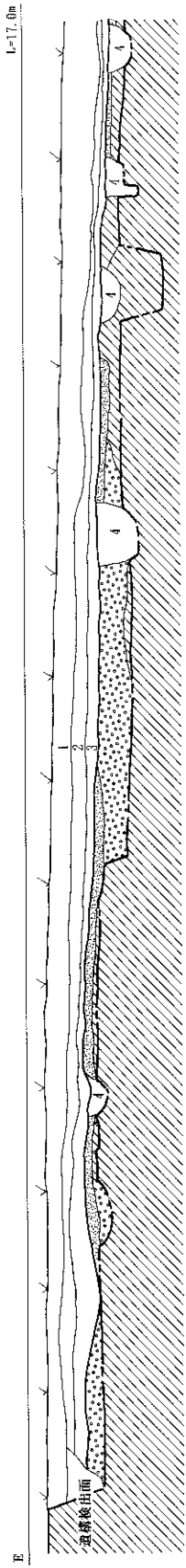
第6図 1トレンチ全景（東から）



第7図 1トレンチ全景（北西から）



第8図 1 トレンチ検出遺構平面図



- 1、乾草塚築地土
- 2、茶褐色土（茶畑耕作土）
- 3、黄褐色砂質土
- 4、黒褐色土（柱穴掘方及び溝）
- 茶褐色砂質土
- 黒褐色土混雜土



第9図 1 トレンチ南壁土層断面図

出土するも細片であるため時期は不明であるが、S B02との切り合い関係よりS B02に先行する建物といえる。

掘立柱建物S B02 トレンチ中央南端で検出した5間(9.2m)×2間(5m)以上の掘立柱建物。梁間については南側拡張部で東西に並ぶ柱列を検出したが、北側柱列とは方位が一致しないことから、拡張部で検出した柱列は、別建物の柱跡と判断した。建物方位はほぼ磁北である。検出状況からこの建物は南北を棟とする建物と考えられる。柱間は堀方中心部を目安として測ると桁行が1.8～2m、梁間は北から順に2.8m、2.2mとなる。柱堀方は一辺0.8～1mほどと大きく、方形を呈する。柱穴は確認できなかった。堀方埋土から古墳時代の須恵器が出土した。

掘立柱建物S B04 トレンチ東側の南端で検出した総柱風の建物である。建物方位はほぼ磁北を示す。建物方位や北端柱列がS B02側柱列と一直線上に並ぶことよりS B02と同時期の建物であると考えられる。建物は確認可能な範囲では2間(10m)×2間(4m)以上である。建物の構造は不明である。柱間は堀方中心部を目安として、南北では4.8mと5.2m、東西では2mを測る。柱堀方は一辺0.7～0.9mの方形プランである。柱穴は確認できたもので直径30cmを測る。埋土から若干の土器が出土した。

掘立柱建物S B05 トレンチ北壁中央部において検出した3間以上×2間の建物。柱間は堀方中心部を目安として桁行は1.8m、梁間は2.1mと2.3mを測る。柱堀方は0.5～0.8mを測る。柱穴は確認できたもので約30cmを測る。建物方位、柱堀方の規模等からS B03と同時期のものと考えられる。

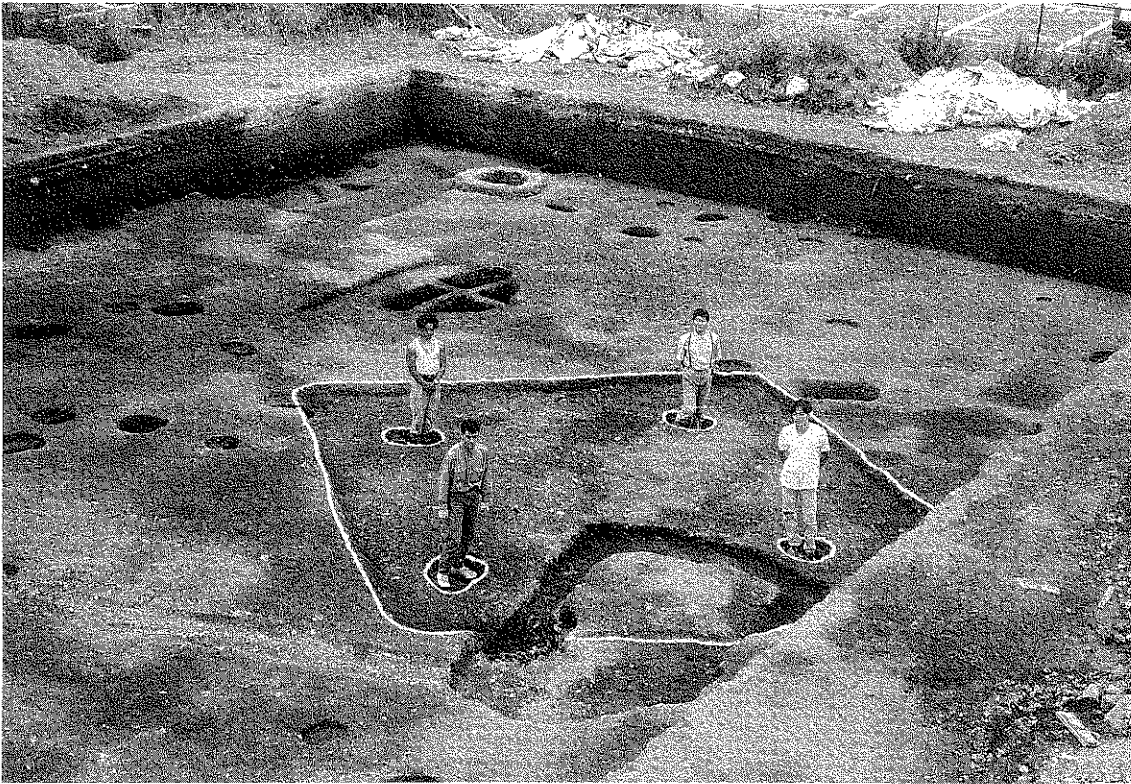
土壌S K10 直径70cmほどの円形の土壌である。黄褐色土層を埋土とするもので、深さは検出面より約40cmを測る。土壌内から織豊期の瓦数点、そして拳大ほどのチャート質の石が出土した。これらは土壌内に廃棄された所産と考えられる。

土壌S K11 東西に長い不定形の土壌で、検出面で東西幅2.8m、南北幅1.5mを測る。埋土は大きく三層に分かれる。下層から順に茶褐色土層、黒褐色土層、暗褐色土層である。埋土は船底状に漸移堆積した状況が窺える。

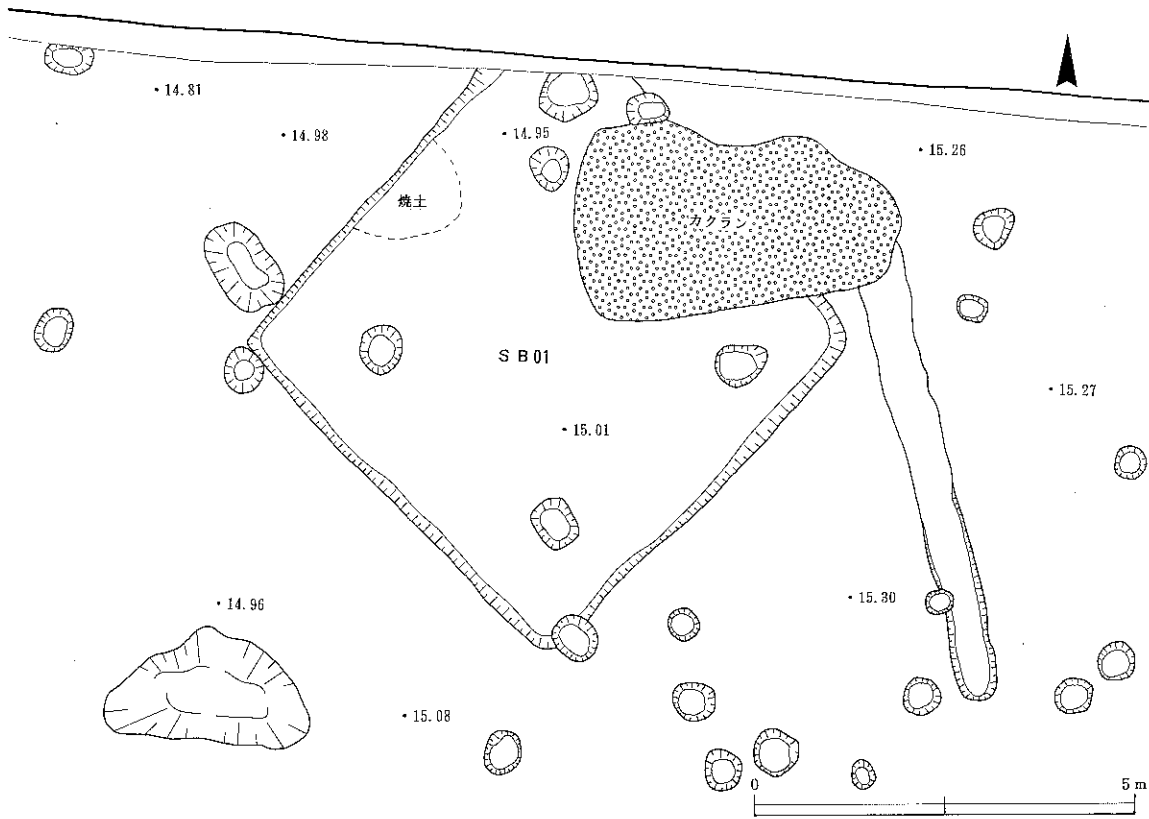
掘立柱建物S B06 3間×3間の建物になると考えられる。柱列はややいびつである。柱堀方は1m程である。

掘立柱建物S B07 トレンチ南壁中央やや西よりで検出した4間の柱列である。おそらく掘立柱建物の柱穴堀方であろう。建物の規模・棟方向については建物が調査範囲外に延びるため不明である。柱間は西から順に1.5m、1.9m、1.5m、1.2mを数える。

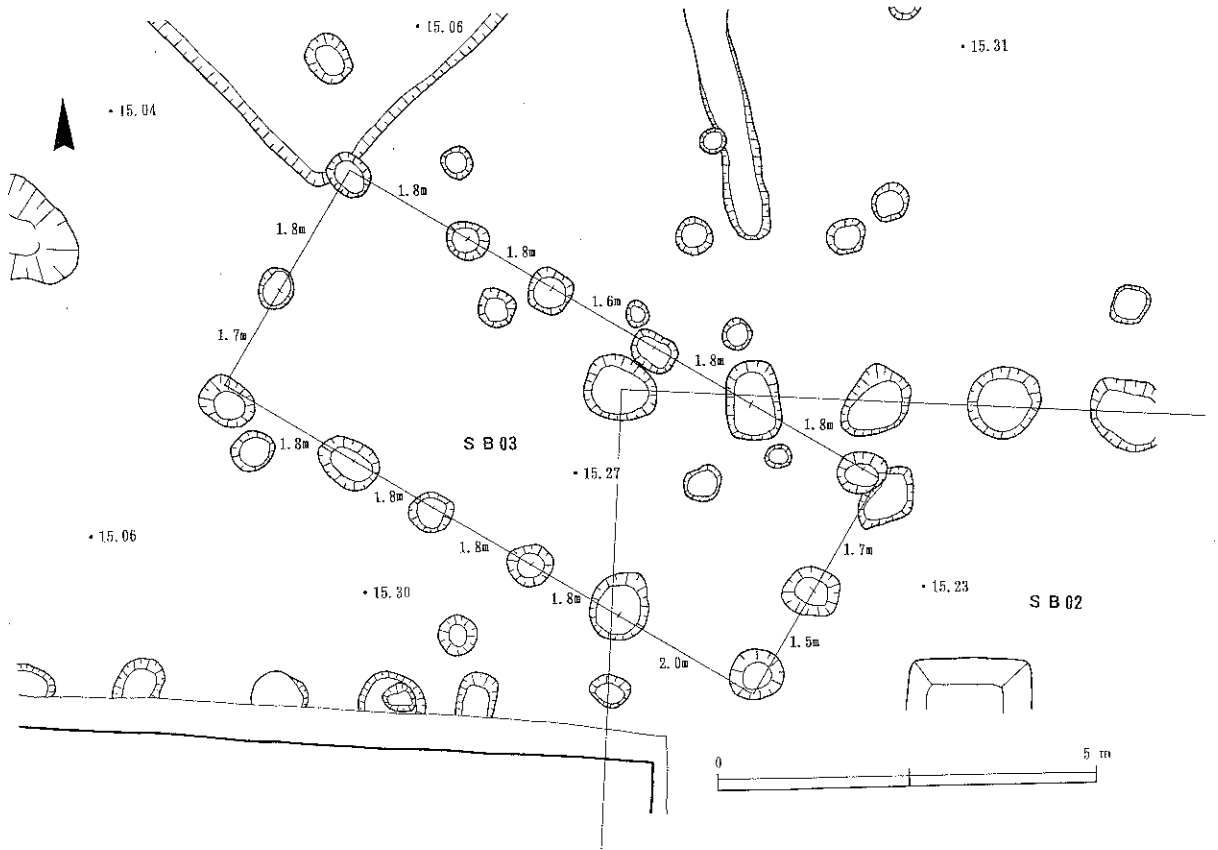
掘立柱建物S B08 トレンチ南壁中央やや東よりで検出した3間の柱列である。おそらく掘立柱建物の柱穴堀方であろう。柱間は西から順に2.1m、1.9m、1.9mを数える。S B07同



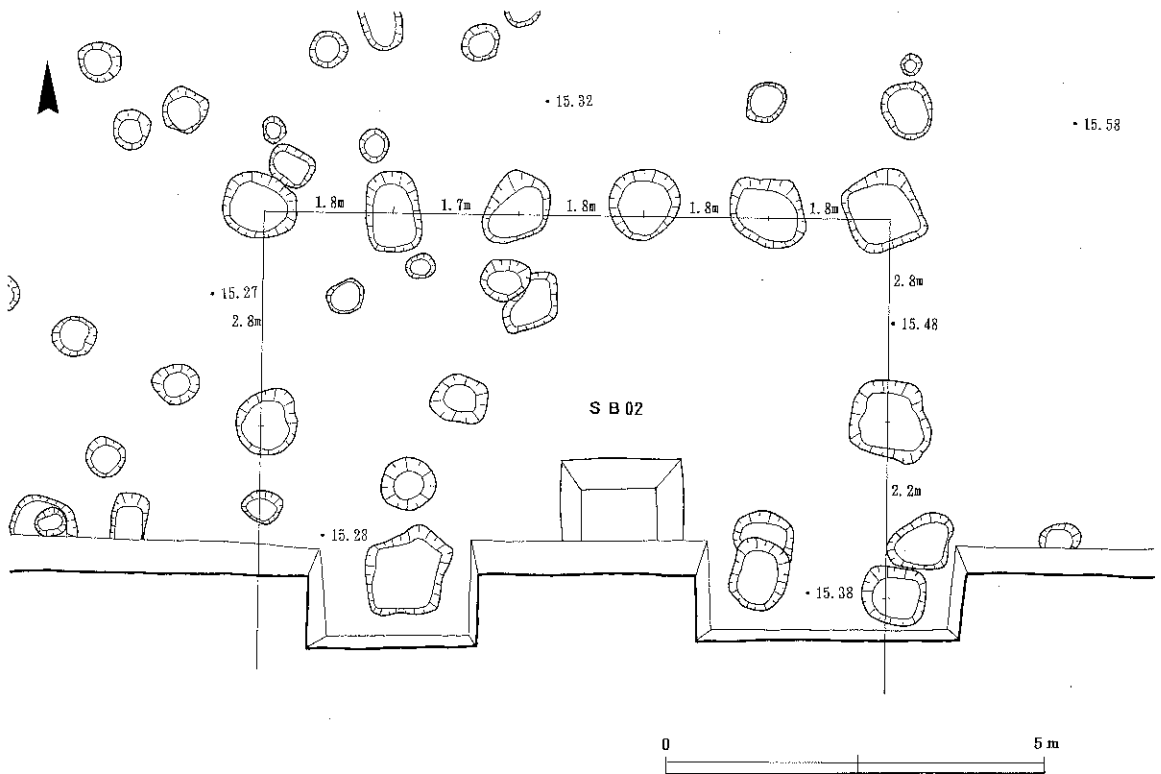
第10図 竪穴住居S B 01（北東から）



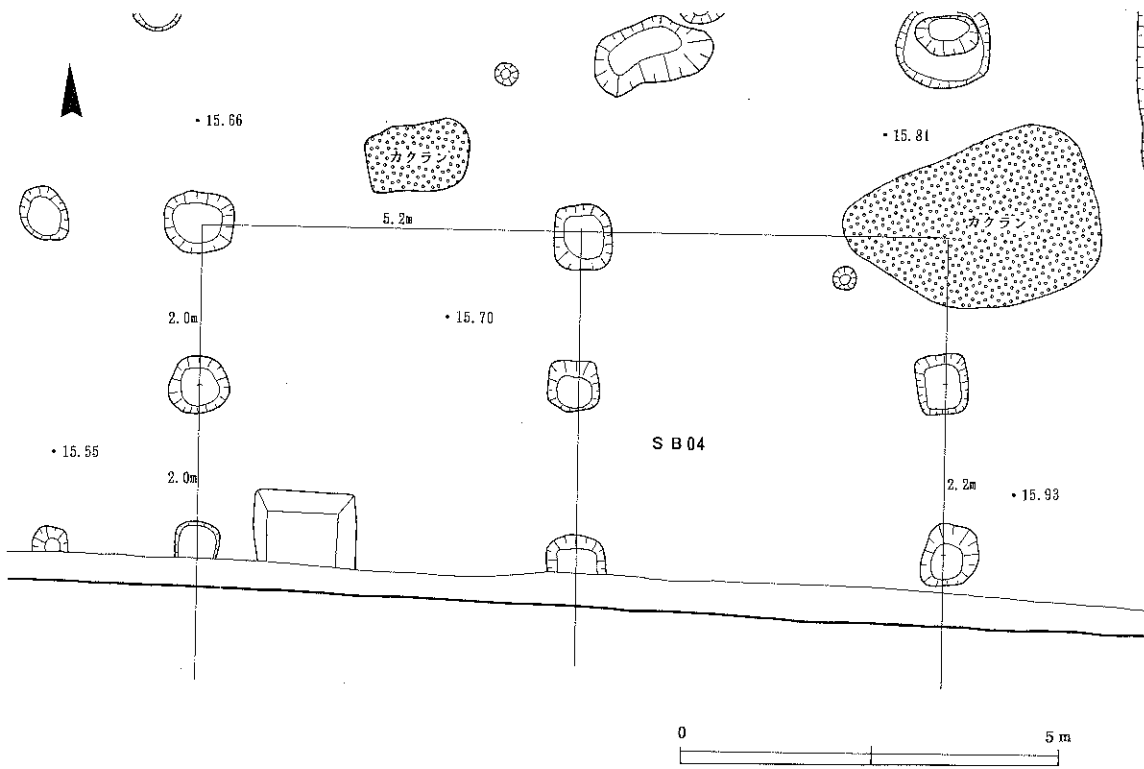
第11図 竪穴住居S B 01実測図



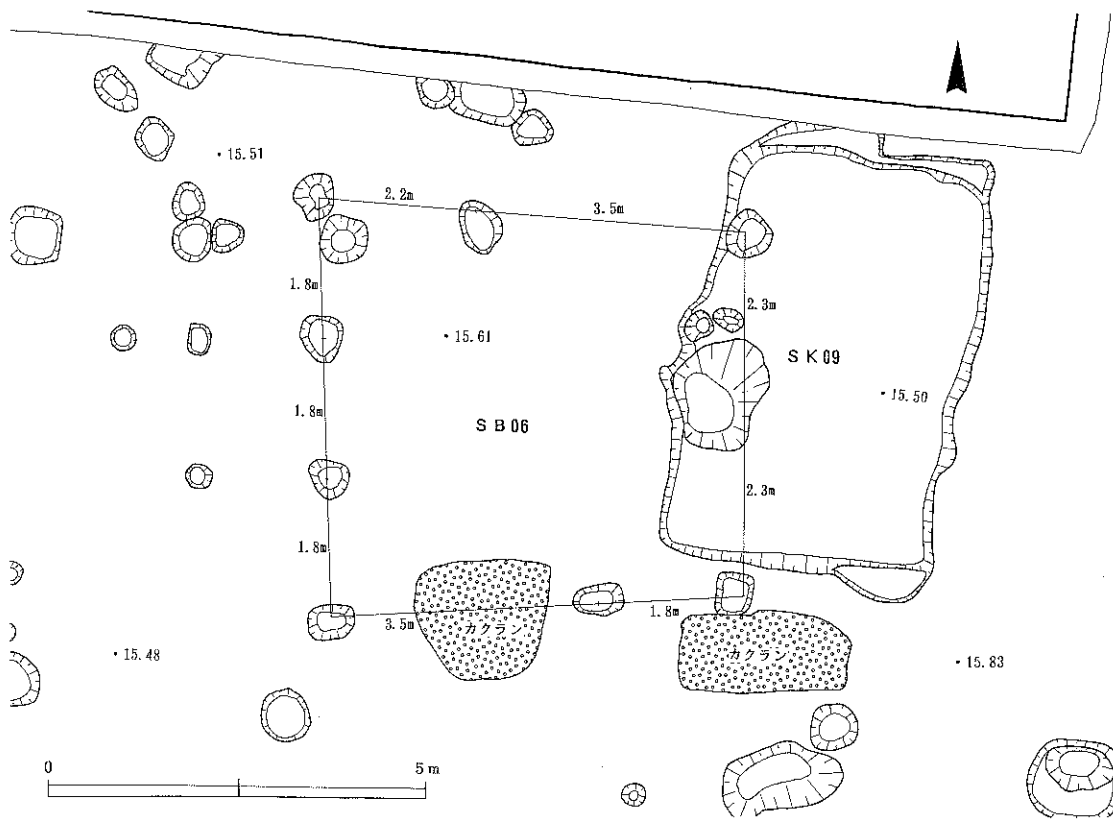
第12图 掘立柱建物S B 03实测图



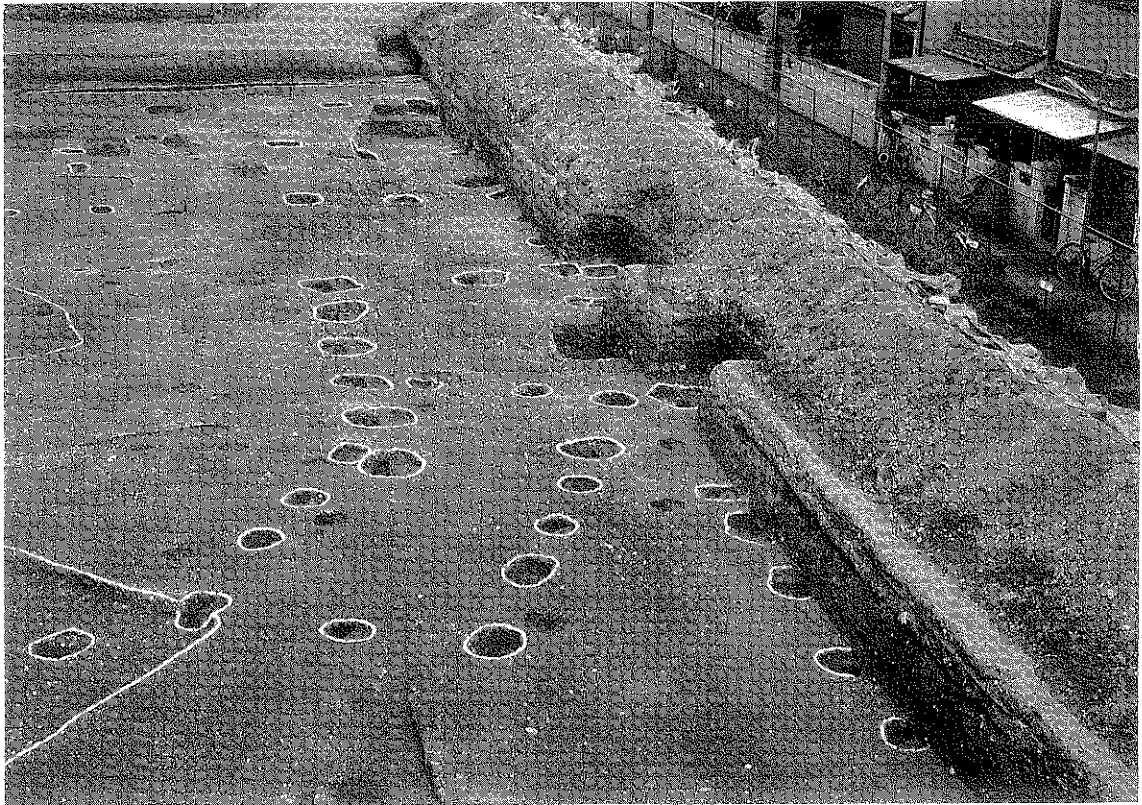
第13图 掘立柱建物S B 02实测图



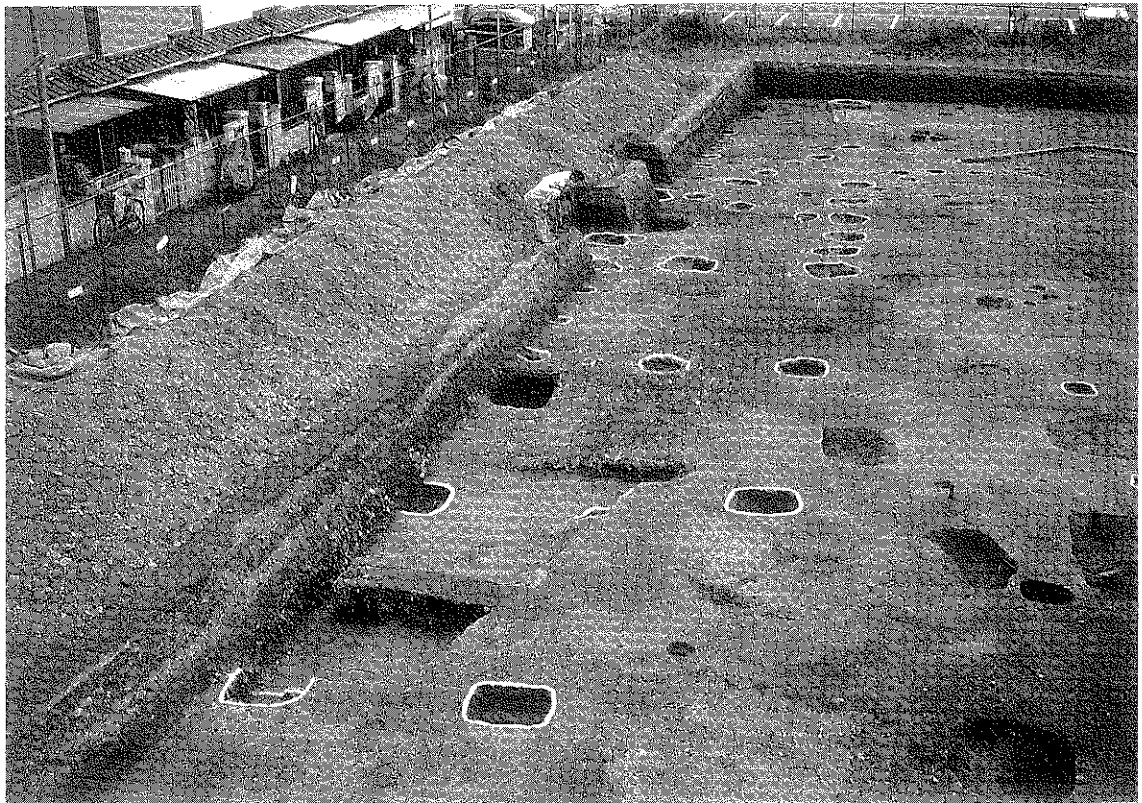
第14図 掘立柱建物S B04実測図



第15図 掘立柱建物S B06実測図



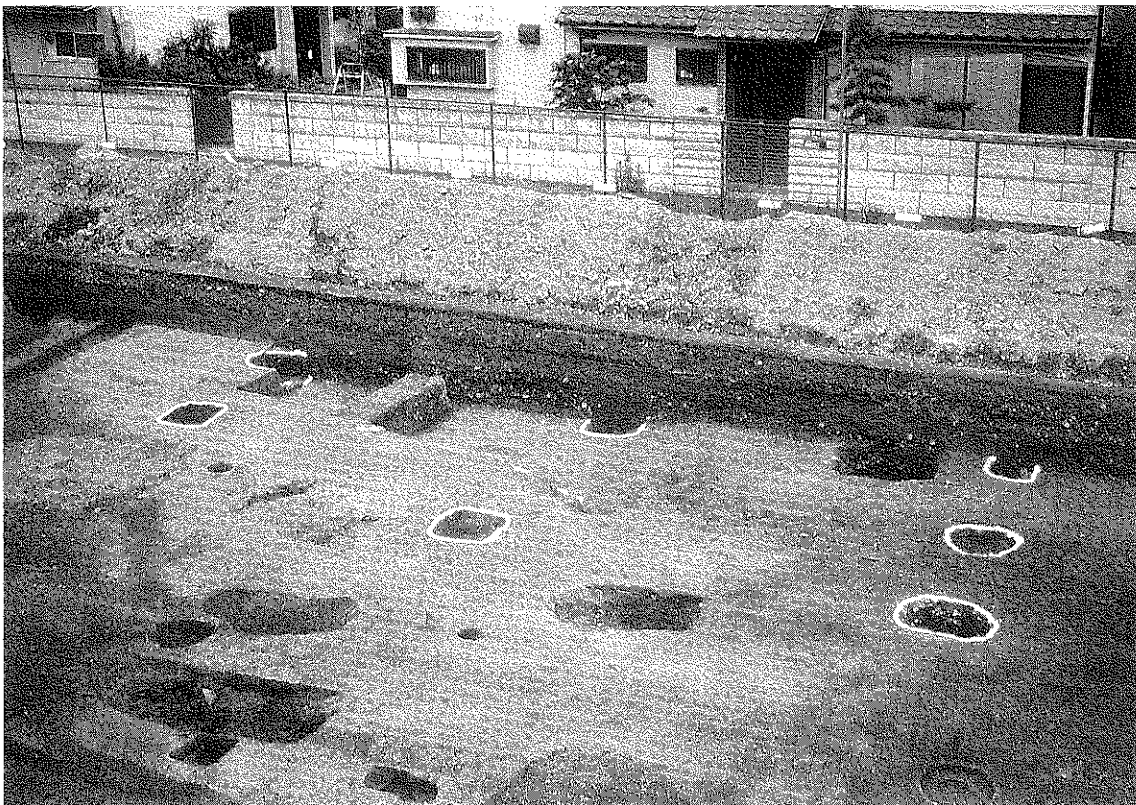
第16図 掘立柱建物S B02・03・07・08 (西から)



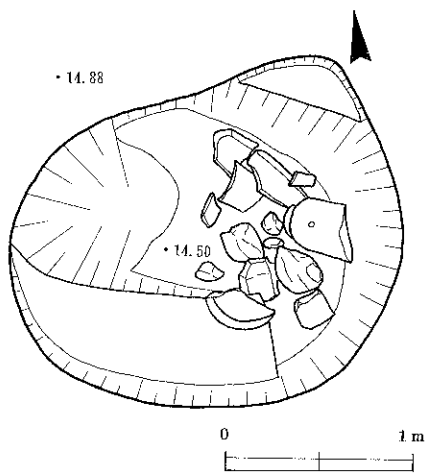
第17図 掘立柱建物S B02・03・07・08 (東から)



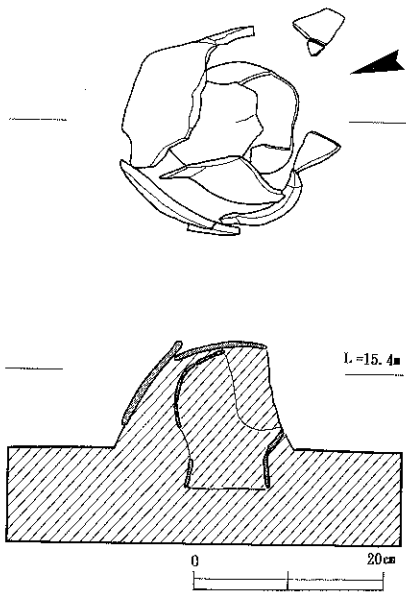
第18図 掘立柱建物S B02 (北東から)



第19図 掘立柱建物S B04 (北西から)



第20図 土壌SK10実測図



21図 埋納遺構B実測図

様、建物の具体的な内容は不明ではあるが、柱筋がSB07と一致することからSB07と同時期の建物であると考えられる。

土壌SK09 南北に長い長方形の縦穴状遺構である。南北幅6.1m、東西幅2.7mを測る。遺構検出面で重複するSB06の柱穴痕が土壌内にはみられなかったため、SB06より新しい遺構であることは間違いない。埋土に、遺物はみられなかったものの、周辺部で中世土器が比較的多く出土している。中世にみられる地下式土壌と呼べるものに該当しようか。

土壌SK12 トレンチ東壁で検出した不定形の土壌である。埋土は茶褐色土層の単層で、底面には遺物がなかったが、上層付近に古墳時代後期の須恵器杯身・蓋を中心として遺物が多く見られた。

埋納遺構B 小型甕の口縁部を下に向け、それに長胴甕の破片で周囲と上面を覆った遺構である。長胴甕の破片は胎土や製作技法等から同一個体であると判断される。破片は接合可と不可に分別される。甕の中に遺物は確認できなかった。埋納の状況については遺構面を掘り過ぎたため明確にできなかった。

埋納遺構A 遺構検出面で出土した底部内面に和同開珎が密着する須恵器底部片である。おそらく短頸壺の底部であろう。

確認枚数は4枚で内3枚がほぼ完存する。底部しか遺存していないため、実際の埋納枚数は不明である。出土した銭の中央の穴が全部揃っており、穴に紐状のものを通して一連にして埋納されたと考えられる。後世の削平により埋納状況は全く不明であり、その性格は明らかにしえない。⁴⁾

溝SD13 幅0.6m、長さ6.5m程の溝で、溝内に細かい礫を敷き詰めている。溝の深さは現状で6cm程しかなく、溝の底部が辛うじて残っている状況と思われる。建物に伴う雨落ち溝とも想定できるが、該当できる建物跡は調査では検出していない。

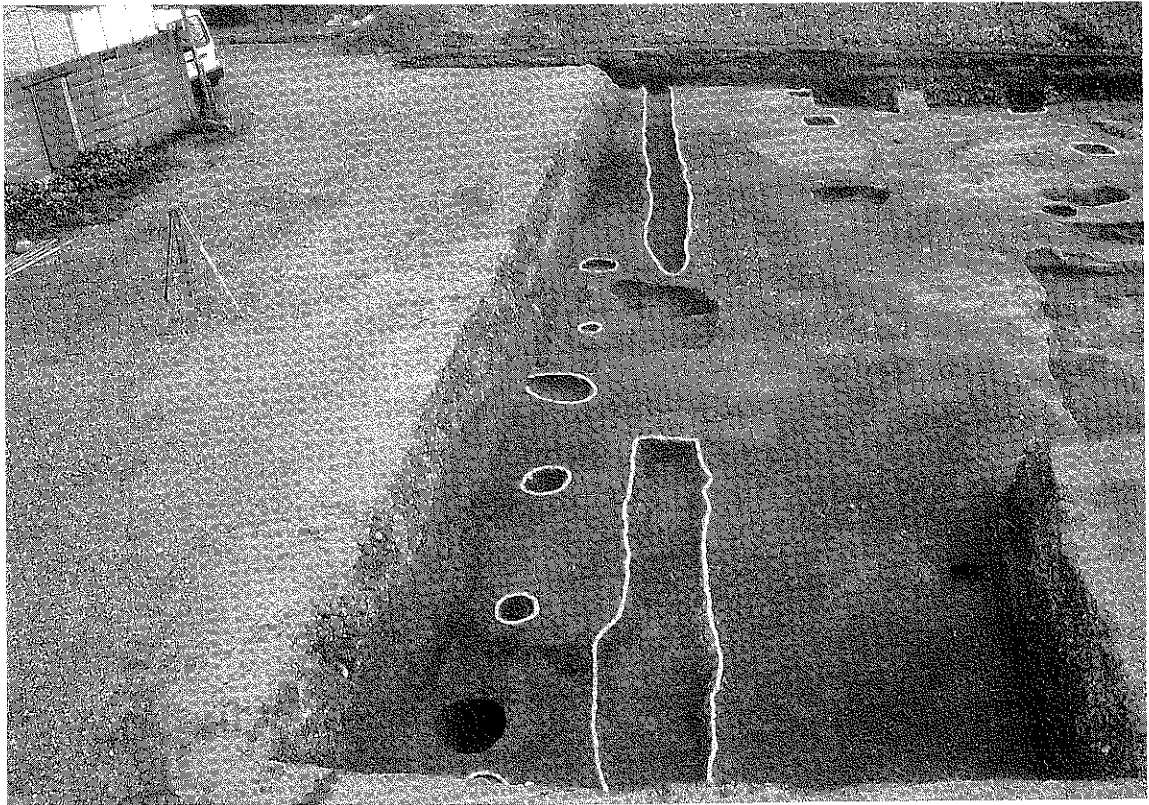
溝SD14 トレンチ東側を南北方向に走る溝である。溝は途中一旦とぎれる箇所がある。溝の幅は約0.7m、深さは10~15cmを測る。埋土は茶褐色系の土であり、遺物は埋土上層から出土した。溝の方位は調査地東に近接して走る奈良街道の方位とほぼ一致する。



第22図 埋納遺構A (東から)



第23図 埋納遺構A (西から)



第24図 柵列SA15、溝SD14 (北から)



第25図 柵列SA15、溝SD14・16 (東から)

溝SD16 SD14から2mほど東で見つかった南北溝。溝の幅は0.6mほどである。遺物は出土していない。溝方位はSD14とほぼ一致する。

柵SA15 SD14とSD16のほぼ中間にみられる南北の柵列。柱間はほぼ均一で約1.8mである。柱穴は0.4~0.7mを測る。埋土上層より瓦器碗片が出土している。

不明遺構SX20 トレンチ南西端で検出した不定形の土壌である。埋土は茶褐色土である。古墳時代の須恵器・土師器、奈良時代の硯等が出土した。土壌は南西に向かって落ち込んでおり、調査範囲外に広がる極めて大きな土壌と想定される。

B. 2 トレンチ

1 トレンチの東側に設定した小さなトレンチである。ここでは現地表面から1m程下で、柱穴の堀方を1つ確認した。堀方は方形で約0.5mを測る。調査面積が限られており、建物の規模は不明である。遺物は出土していない。このトレンチで建物跡が見つかったことによって、1 トレンチで見つかった遺構群は東側の奈良街道付近にまで広がることが明らかとなった。

V. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、整理箱にして10箱分であり量的には少ない。種類としては須恵器・土師器等の土器類・古銭（和同開珎）・鉄製品があり、時代的には古墳時代～織豊時代までである。量的には古墳時代の遺物が大半を占める。遺物の出土状況についてはほとんどが遺構に伴っての出土ではなく、遺構基盤土層である黒褐色土層やその上層の黄褐色砂質土層中からの出土である。また遺構に伴って出土した遺物についても遺構との切り合い関係等から、明らかに前代の遺物の混入品と考えられるものがあり、遺物が示す年代観をもってその遺構（特に掘立柱建物）の時期を決定づけるには至っていないものがある。掘立柱建物については、柱堀方と柱穴の土層識別ができず、一括に取り上げている。

以下、遺構毎に出土遺物を述べていく。

S D 14（第26図） 1は須恵器坏蓋である。天井中央部に非常に扁平なつまみを持つ。淡青灰色。2は須恵器坏身である。内傾する短いたちあがりを持つもので、口径約13.4cm、器高約3.9cmを測る。青灰白色。3は土師器の甕である。口縁は外反し、端部は丸くおさめる。口縁内面にはハケ目がみられる。体部外面はハケ調整の後、粗い分割ミガキを行っている。体部内面には粘土紐痕、指オサエ痕がみられる。口縁直径約14cm。胎土は精良である。赤褐色。

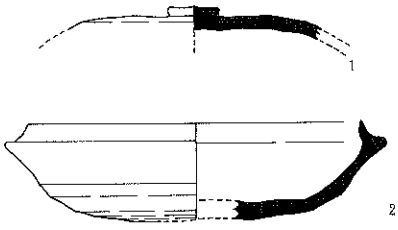
S A 15（第26図） 4は瓦器椀である。高台断面が台形のしっかりしたもので、見込みの暗文はジグザグ状を呈する。

S B 04（第26図） 5は須恵器高坏の脚部か。淡青灰色。

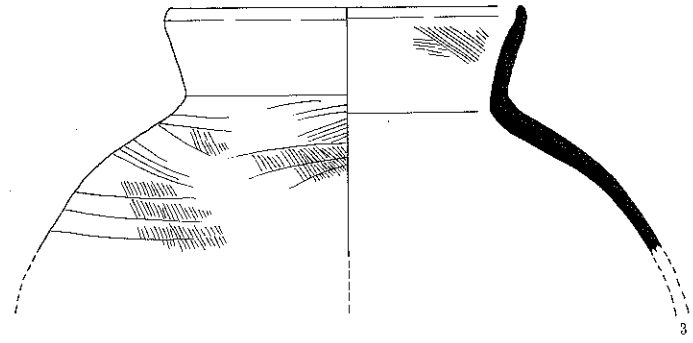
S B 03（第26図） 6は須恵器坏身である。短い受部を持つ。青灰色。

S B 01（第26図） 全て須恵器である。7は坏蓋である。全体的に扁平な蓋である。口径13.8cm、器高2.9cmを測る。8は坏蓋である。全体に丸みを持つ。天井部中央に中凹みのつまみを持つ。青灰色。9は無蓋高坏の坏身部である。口径13.4cmを測る。口縁部は外反気味に開き、端部は丸くおさめる。体部中程に断面三角形の低い突帯が巡る。突帯下に刺突文を施し、坏の底部近くに段を有する。外面に自然釉が若干付着する。淡青灰色。10は長脚二段の高坏脚部である。長方形の透かしを三方向、上下二段に配す。上下二段の透かし穴の間には二本の沈線が巡る。脚部の外面にはカキ目を施す。青灰色。11は甕である。頸部は緩やかに外反し、口縁部は外側へ帯状に肥厚している。体部外面に格子叩き痕、内面に同心円文叩き痕がみられる。叩きの後、口頸部内外面ともにナデを施す。口径20.1cm、器高34cmを測る。やや軟質、灰白色。

S D 14

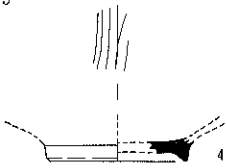


2



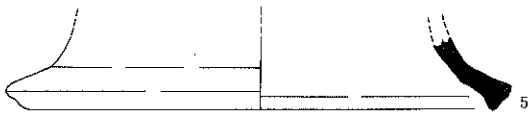
3

S A 15



4

S B 04



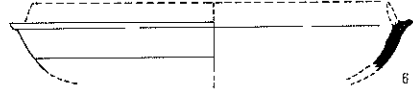
5

S B 01

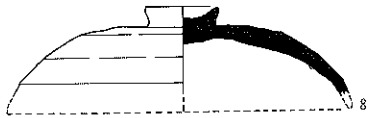


7

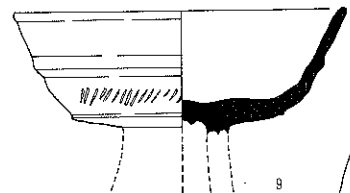
S B 03



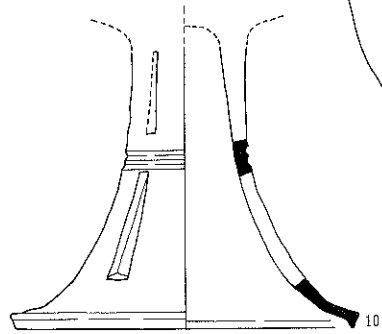
6



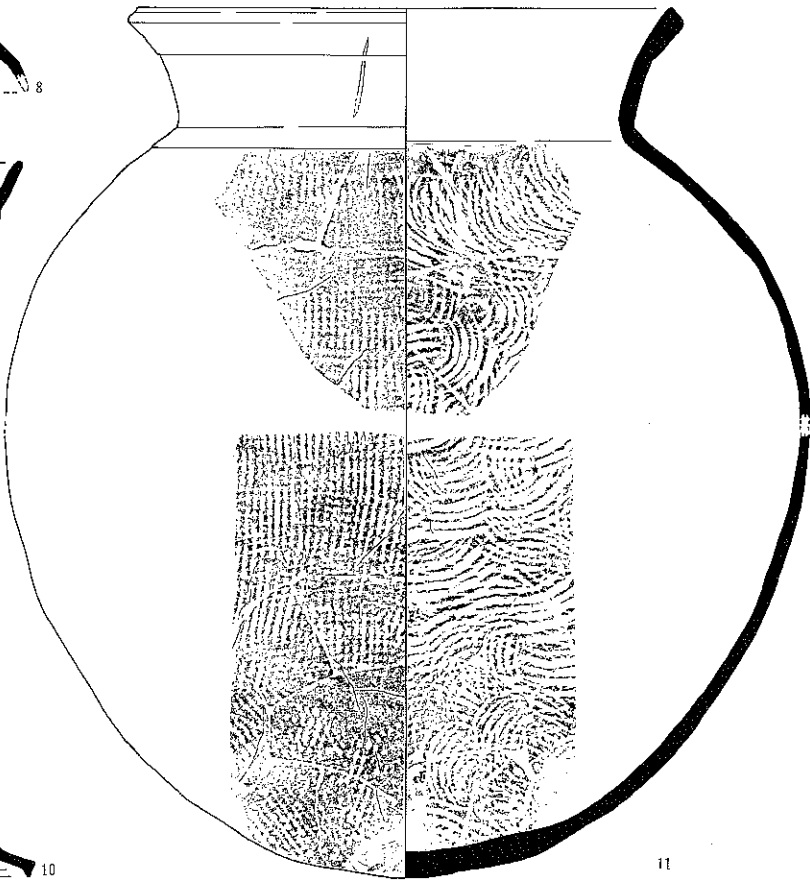
8



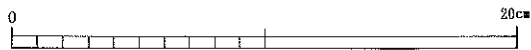
9



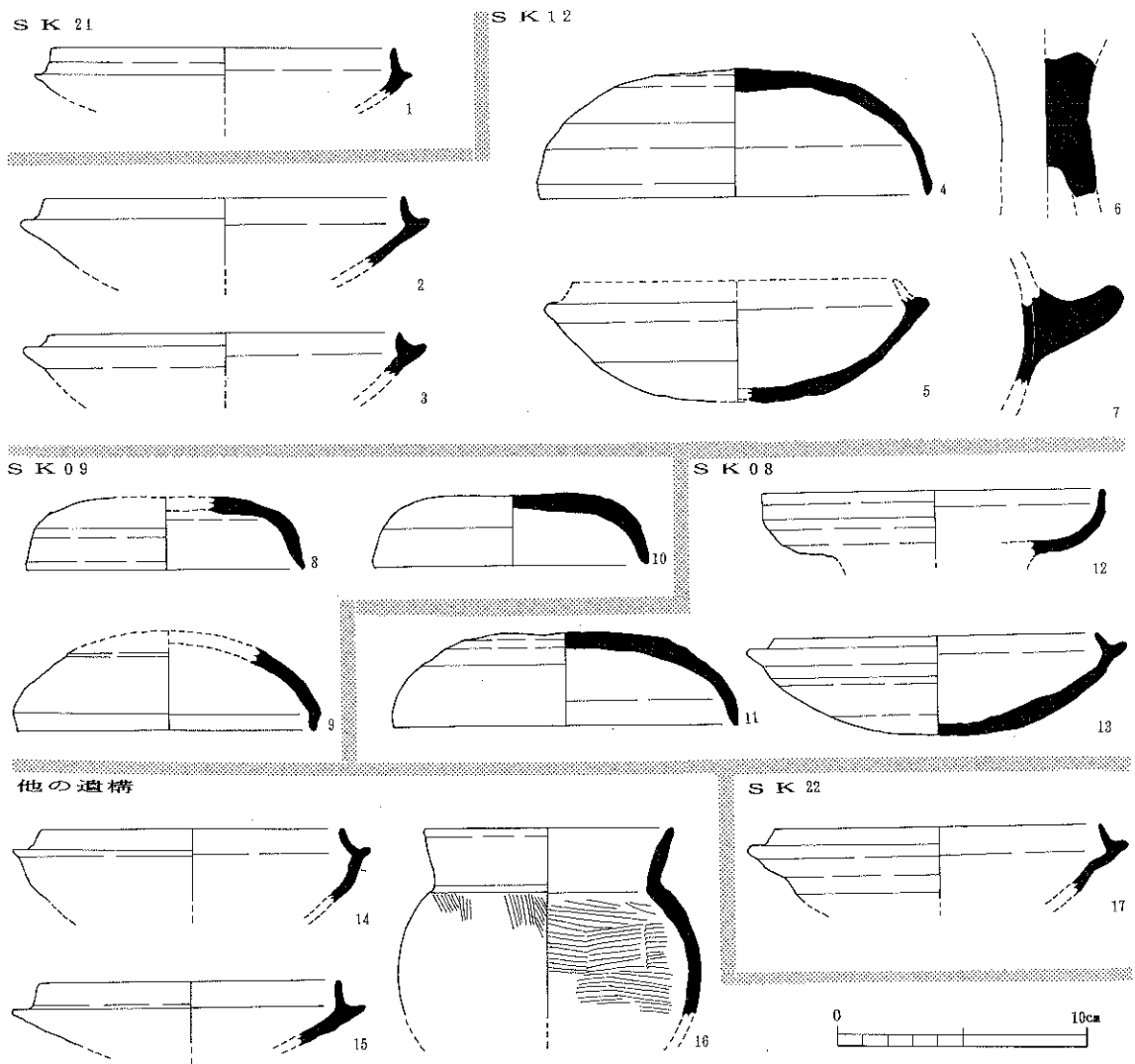
10



11



第26图 出土遺物実測図

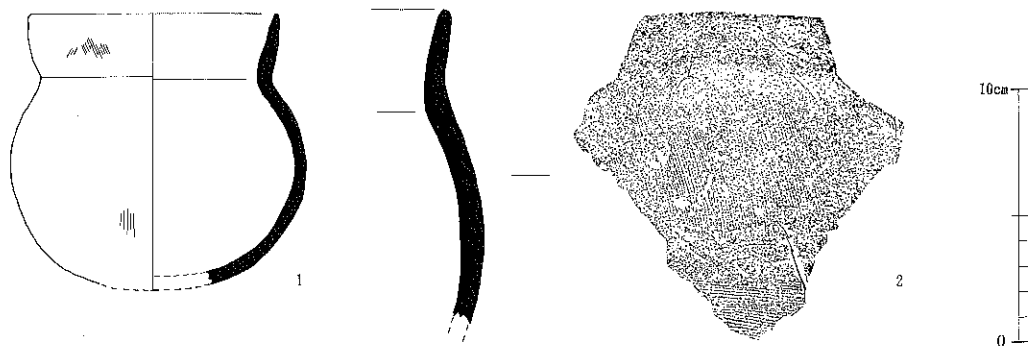


第27図 出土遺物実測図

SK 21 (第27図) 1は須恵器坏身である。口縁部は垂直気味に立ち上がる。体部外面に自然釉が付着する。口径14cmを測る。青灰色。

SK 12 (第27図) 2・3・5は須恵器坏身で、いずれもたちあがり短い。4は須恵器坏蓋である。口径15.6cm、器高5.2cmを測る。全体に丸い。天井部からなだらかに口縁部に続き、端部は外傾する面を持つ。青灰色。6は土師質の棒状の土器である。器種不明。7は土師器甕の把手である。

SK 09 (第27図) 8・9は須恵器坏蓋である。8は口径11.2cmを測る。扁平な天井部を持つ。水平な天井部から屈曲して口縁部に続き、端部をやや外反気味におさめる。天井部内面中央に不定方向のナデを施す。やや軟質、青灰白色。9は口径12cmを測る。口縁部は内側へ屈曲して端部をやや外反気味に丸くおさめる。青灰色。10は土師質の杯蓋であるが、これは2次的被熱によって須恵器が赤変色して、土師質になったものと思われる。口径11cm、器高



第28図 埋納遺構Bの土器実測図

2.9cmを測る。扁平な天井部を持つ。水平な天井部から屈曲して口縁部に続き、端部を内湾気味に丸くおさめる。

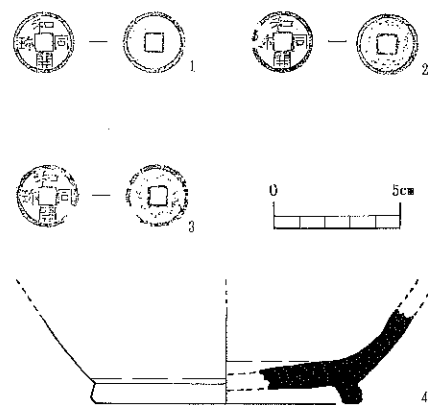
S K 08 (第27図) 3点とも須恵器である。11は坏蓋である。口径14cm、器高3.8cmを測る。水平な天井部から内湾気味に口縁部に続く。青灰色。12は高坏坏身か。口径14cmを測る。口縁部はわずかに外反する。外面に自然釉が付着する。淡黒灰色。13は坏身である。口径13cm、器高4cmを測る。たちあがりは短い。底部内面中央には指頭圧痕と不定方向のナデがみられる。青灰色。坏身である。

S K 22 (第27図) 17は須恵器坏身である。たちあがりは短く内傾する。受部はやや上向きである。体部外面にヘラ削り、口縁部外面にロクロナデを施す。青灰色。

他の遺構 (第27図)

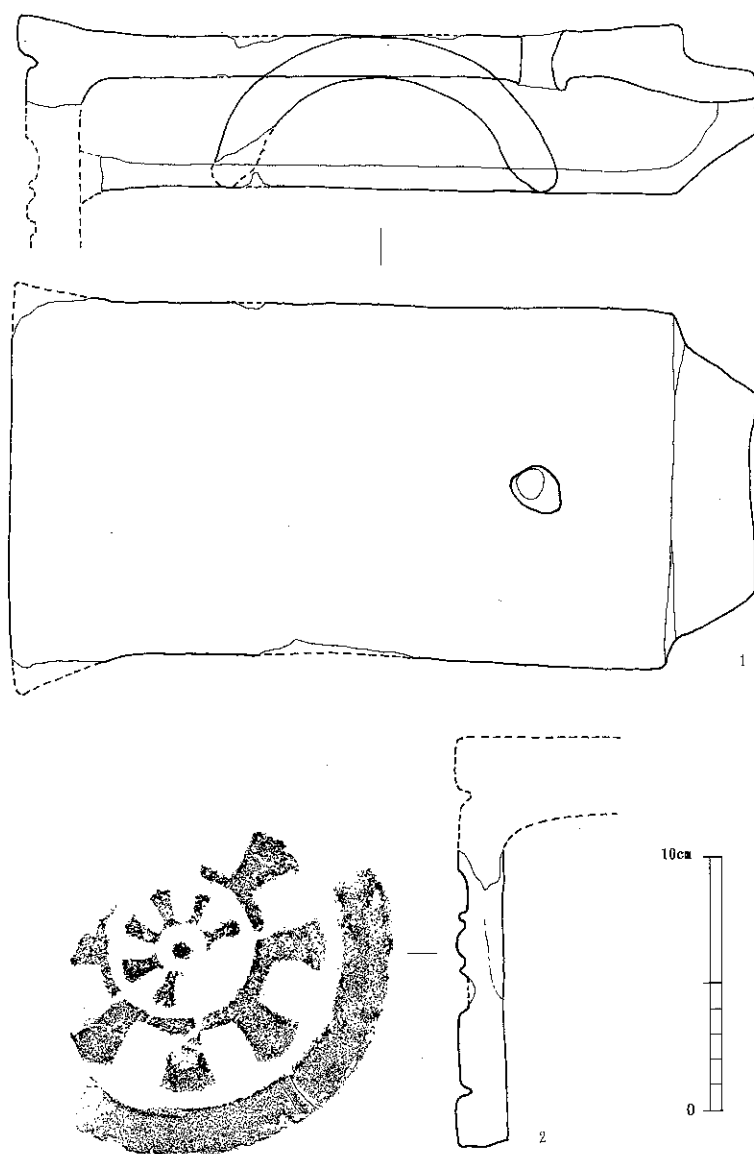
14・15は須恵器の杯身である。14は口径12cmを測る。内傾するたちあがりを有する。青灰色。15は口径12cmを測る。たちあがりはほぼ垂直である。黒灰色。16は土師器甕である。口縁は外側に直線的にたち上がる。体部外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整を施す。口径約10cmを測る。黄褐色。

埋納遺構Bの土器 (第28図) 1は土師器の甕である。体部は球形を呈し、口縁は内湾気味に立ち上がる。口径10.1cm、器高約11cmを測る。摩耗が著しいが、外に若干のタテハケ調整がみられる。内面はナデ調整である。淡黄褐色。2は土師器の長胴甕である。口縁部のみ辛うじて図化可能であった。口縁はわずかに外側に立ち上がり、体部は内外面ともに細かなハケ調整を行う。黒褐色。焼成良好。



第29図 埋納遺構Aの土器・和同開珎

埋納遺構Aの土器 (第29図) 4は須恵器短頸壺の



第30図 土壇S K06出土瓦実測図

底部である。高台径10.4cmを測る。高台接地面はほぼ平坦である。体部外面下半にヘラ削りを施す。軟質、青灰色。

S K06 (第30図) 2は輪宝文軒丸瓦である。瓦当直径16.8cm、玉縁部は短く長さ約3cmほどである。風化が著しいため製作技法が明らかではないが、共伴した丸瓦には凸面に布目痕、コビキA手法がみられた。硬質、黒灰色。胎土に長石を多く含む。吊り紐痕はみられない。全長約30cm。³⁾伏見城跡に同文がある。

包含層出土遺物

古墳～奈良〔須恵器〕

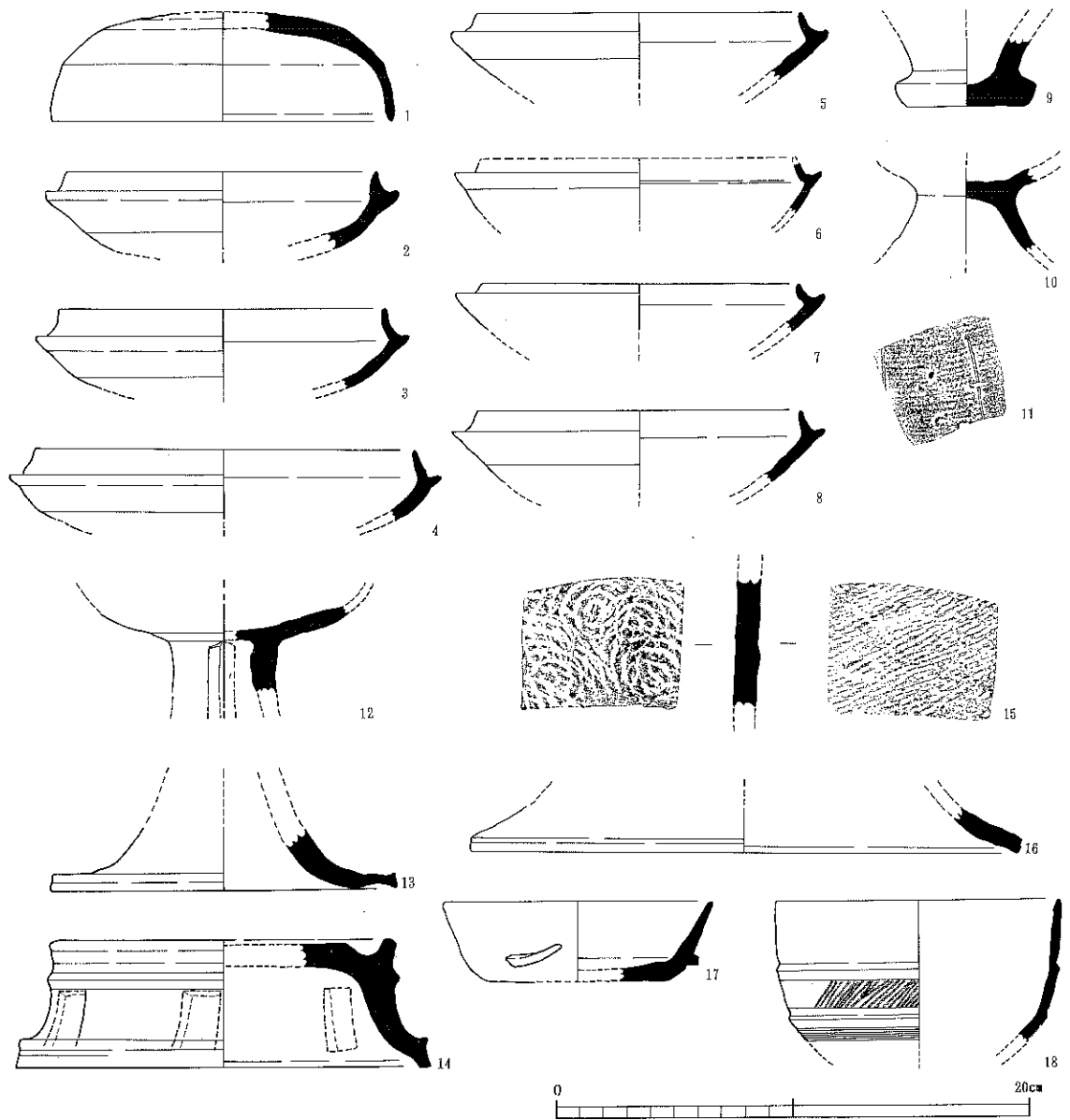
(第31図) 1は坏蓋である。口径14.6cmを測る。天井部から口縁部へなだらかに続く。

内湾気味の口縁部は内傾した凹面をなし、口縁部外面にはナデを施す。軟質、灰白色。2～8は坏身である。2は口径13.2cm、3は口径14cm、4は口径16.2cmを測る。5は口径13.8cm、6は口径13.6cm、7は口径14.2cmを測る。いずれもたちあがりは短く内傾する。9はすり鉢である。底部径は5cm程を測る。底部は平坦で端部は丸みのある外傾した面を持つ。体部外面には自然釉が付着する。青灰色。10は短脚高坏の脚部である。細い脚基部がラッパ状に広がる。坏底部外面と脚部内外面にナデを施す。淡青灰色。11は硯脚部の断片と思われる。一定方向に鋭く二本の沈線が破片に確認でき、透かし穴の省略化したものと思われる。外面に自然釉が付着する。青灰白色。12は高坏の腰部である。長方形の透かしを二方向に配す。坏部外面にヘラ削り、脚部外面にロクロナデを施す。青灰色。13は高坏脚部であろう。脚部はラッパ状に広がり、端部は外に面を持つ。褐灰色。14は圈脚円面硯である。陸部は海

部より一段高く海陸の区別が明瞭なものである。外堤下端には断面三角形の低い突帯を巡らし、長方形の透かしがある。全高5.5cm、外径17.6cm。硬質、灰色。15は甕の体部片である。外面に平行叩き痕、内面に同心円文叩き痕がみられる。叩きの後、外面にナデ、内面に不定方向のナデによる調整を行う。青灰色。16は高坏の脚部か。17は坏身である。口径11.4cm、器高3.4cmを測る。平坦な底部から口縁部に外を向いて直線的に開く。底部外面に緑色の自然釉が付着する。体部外面に須恵器破片が付着する。淡青灰色。18は台付き椀である。口径12cmを測る。口縁部は垂直にのびて内側に端面を持つ。体部と口縁部の境と体部下部にそれぞれ段をなし、段の間に乱雑な櫛描き列点文が巡る。体部に沈線が四本巡る。青灰色。

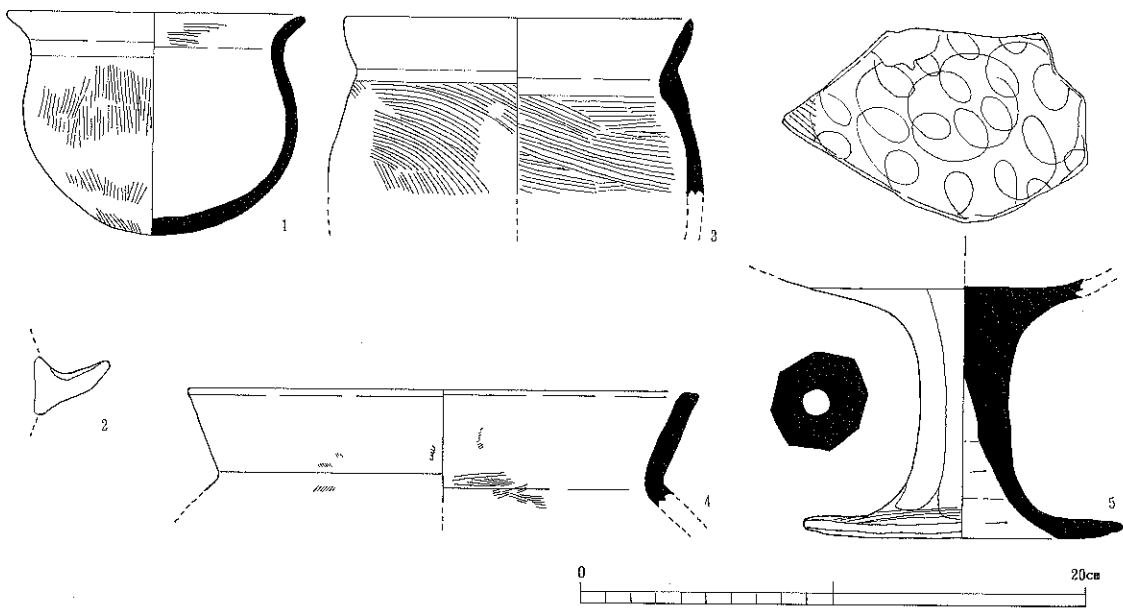
古墳～奈良〔土師器〕(第32図) 1・3・4は甕である。1は、口縁は緩やかに外反するものである。摩耗が著しくハケ調整以外の調整は読み取れない。ハケ調整は、体部外面にタテハケ、口縁部内面にヨコハケがみられる。底部外面に煤の付着がみられる。口径約12cm。淡黄褐色。3は、口縁部は内湾ぎみに立ち上がるものである。体部内面はヨコハケ、外面はナナメ方向に立ち上げるハケを施す。ハケはいずれも粗い。口径約13.6cm。赤褐色。4は口縁が外側に直線的に立上がり、端部上面を面取りしたものである。口縁部の調整は外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整した後いずれもヨコナデ調整により仕上げを行っている。赤褐色。5は高坏である。杯部外面は丁寧なミガキを行う。裾部外面はおそらく五区にわけてミガキを行い、内面は横方向にヘラケズリを行う。脚部外面はヘラケズリにより面取りし、断面八角形となる。杯部内面はナデ調整の後底部にラセン暗文、体部に放射暗文を施す。硬質、赤褐色。その諸特徴から平城宮土器Ⅳに比定される。

中世(第33図) 1は口縁部を外反させ、その後端部を内側に折り曲げたもので、いわゆる「て」字状口縁と呼ばれる土師皿である。口径9.8cm、器高1.5cmを測る。淡黄褐色。2は巴文軒丸瓦である。中心飾に左巻き三巴文を配し、外区内縁に珠文を散漫に配する。瓦当直径約10.6cm。灰色、胎土は粗い。その諸特徴から平成6年度にまとまって出土した軒丸瓦と同一の栗栖野系軒瓦である。13世紀前半頃のものであろう。3は瓦器椀とみられる。高台断面は三角形状を呈する。4は土師皿である。口縁部はゆるやかに外反する。器高は低く2cm程で、口径は15.6cm程を測る。口縁部外面にはヨコナデがみられる。土器の色は黄褐色であるが、内面全体は朱色を呈しており、断面観察によると朱色が内面にまでかなり及んでおり、特に底部ではそれが顕著にみられた。この土器は朱色の液状のものを入れる器として利用されたものであろうか。6は瓦器椀である。体部内面は細かなヘラミガキが施され、外面はわずかにヘラミガキがみられ口縁内縁部に沈線がみられる。7は瓦器椀である。内湾する体部に、口縁端部がヨコナデによりわずかに外反するものである。口径は直径約15.6cmを測る。体部内面は細かなヘラミガキが施されるが、外面には分割性の粗いヘラミガキが施される。

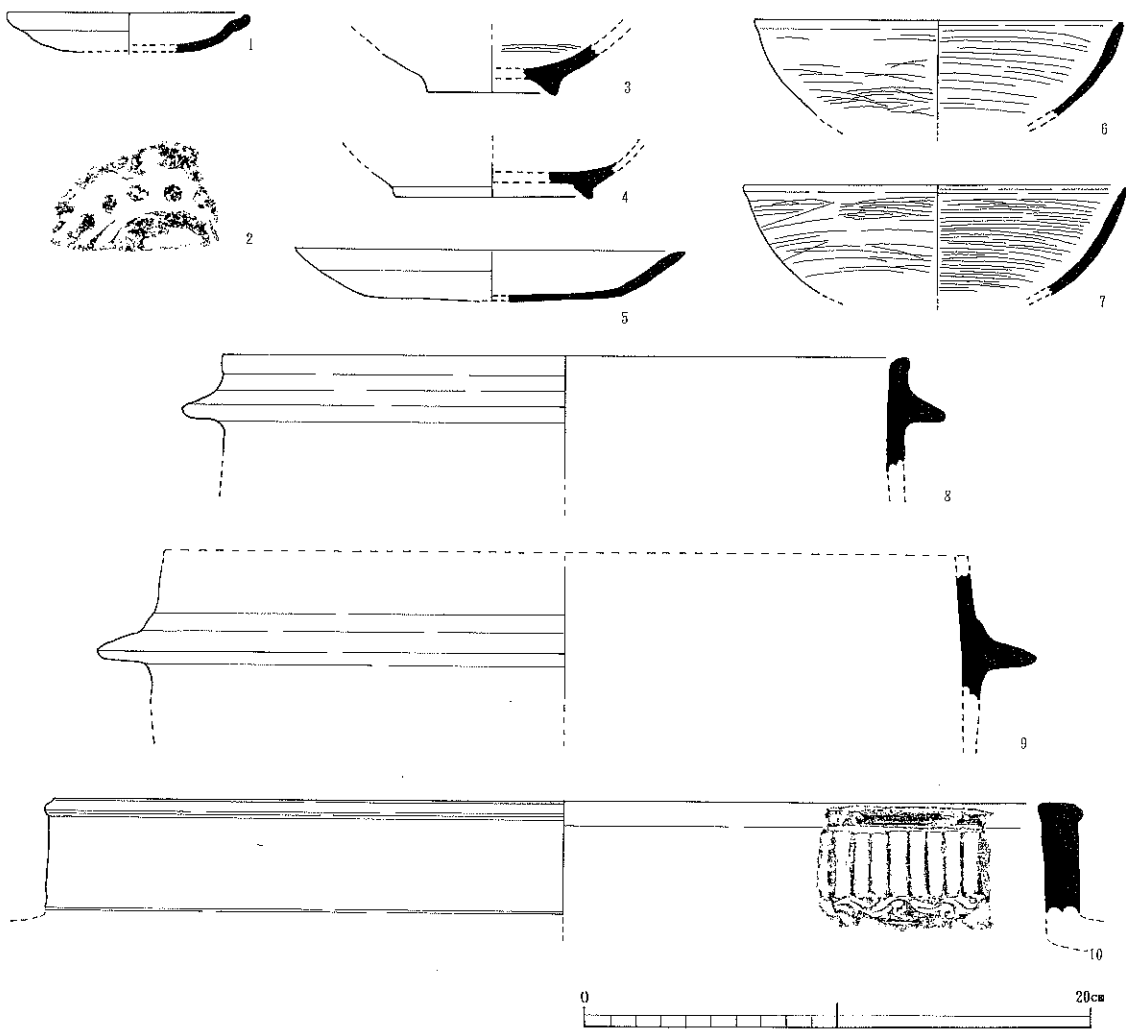


第31図 包含層出土須恵器（古墳～奈良）実測図

口縁内縁部に沈線がみられる。8は土師質羽釜である。9は瓦質土器羽釜である。10は瓦質土器風炉の口縁部破片であろう。口縁外面に連子状にキザミを入れその下に唐草文を配する。その下部については、接合する際にキザミを入れるその痕跡がみられることから接合部で剥離してしまったと考えられる。他の類例から、この剥離箇所から外側に大きく膨らむようである。



第32図 包含層出土土師器（古墳～奈良）実測図



第33図 包含層出土遺物（中世）実測図

VI. ま と め

前章までに今回の発掘調査の成果、ならびに検出した遺構ならびに出土した遺物についての報告をした。ここでは、これらの成果を整理して本報告のまとめとする。

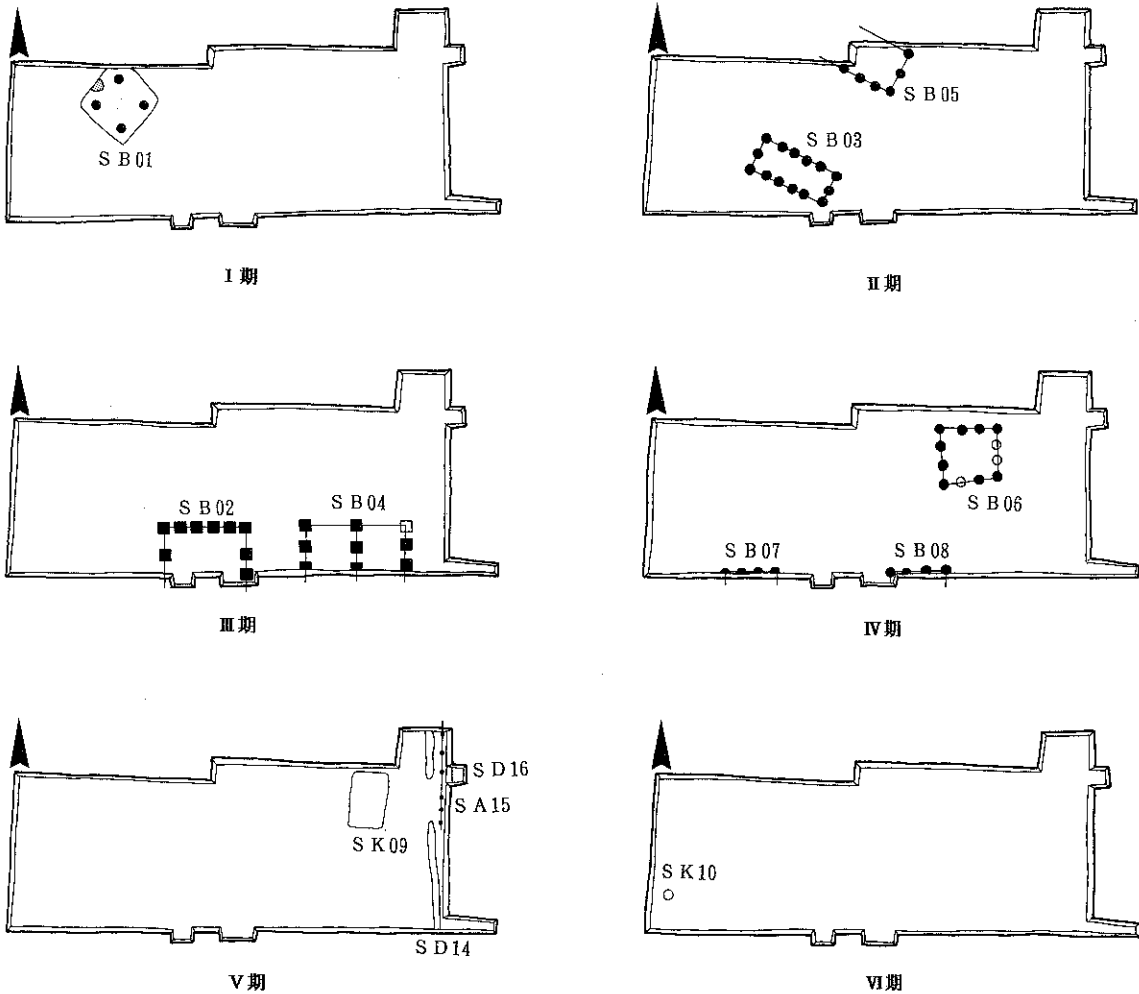
A 遺構の変遷

今回の発掘調査では、古墳時代後期から中世におよぶ遺構・遺物が検出され、西浦遺跡一帯に長期にわたって集落が形成されていたことが明らかとなった。検出した遺構は、遺構の切り合い関係、土器の様相等から概ね6つの各期に分けることができた。時期については、遺物と遺構との対応関係に不明な点が多く、明らかにはできない。以下、このような状況を踏まえつつ、遺構の変遷過程を記述する。

I期 カマドをもつ竪穴住居S B01が該当する。前述したように通常の竪穴住居跡より規模が大きい。床面から遺物は出土していないが、住居跡の埋土中からT K209比定の須恵器が出土する。住居跡周辺部には古墳時代の遺物の散布状況が認められないため、これらの遺物は住居跡に伴う遺物の可能性が高い。これらはおそらく住居跡の廃絶年代を示しており、住居跡S B01は古墳時代後期後半に廃絶したといえよう。調査地から南南東300mでの平成4年度の発掘調査でも、今回検出した住居跡S B01とほぼ同時期の竪穴住居が1棟見ついている。さらにその調査成果によればこれ以外にも複数竪穴住居が存在したようである。今回の発掘調査でも、遺物量は決して多くないが同時期の遺物が包含層中に散在的に出土している。今回出土の竪穴住居の検出壁面高が15cm程であることからすでに本来の遺構面が削平されたと考えられ、包含層出土の古墳時代の遺物はその削平によって消失した遺構の様相を間接的ながら示していると思われる。調査地周辺にも集落が展開していたと想定できる。

II期 建物方位ならびに柱掘方の規模がほぼ同じであることから掘立柱建物S B03・S B05が同時期に築造された。掘方の切り合い関係から後述する掘立柱建物S B02に先行する時期の建物と判断し、II期とした。時期は定かではないが、III期は後述するように出土遺物との建物規模との整合性から奈良時代中頃と想定した。したがって、II期は古墳時代後期以降奈良時代中頃に時期幅が限定されよう。II期の年代に該当、興味深い遺物に円面硯がある。III期への遺構の変遷過程すなわち掘立柱建物の規模拡大の意義を考える上での前段階の状況がここに示されており興味深い。

III期 掘立柱建物S B02・S B04が該当する。建物規模、柱掘方から想定してかなりの規模をもった建物が林立していたことを推測させる。2棟いずれも、全体の一部を検出しただけであり、建物の構造を復元するには至っていない。時期については証明できる決定的資料



第34図 遺構変遷図

が見出だせないが、出土した遺物でこれらの建物との整合性で見ると、精巧に作られた土師器の高坏を候補として挙げておきたい。とすればⅢ期は奈良時代中頃となる。なお「和同開珎」を納めた壺も概ねこの時期に該当する。

Ⅳ期 掘立柱建物S B07・08・06が該当する。S B07・08については一部の確認であるため建物規模は不明であるが、S B06と同一のものを想定するならば、いずれも3間×3間の平面形状の建物となる。すなわちⅣ期における遺構は、倉庫風の建物が林立した状況をイメージすることができよう。

Ⅴ期 柵列S A15、溝S D14・16、土壌S K09が該当する。溝S D14・16はほぼ同一平行に南北に走り、その間を柵列S A15が同じ状況で南北に走る。この状況から柵列S A15は屋根が付設した板塀的なものであり、溝S D14・16は板塀の屋根から落ちる雨を受ける雨落ち溝であったと推測できる。さらにその方位は調査地東側を南北に貫通する旧奈良街道と一致する。旧奈良街道からS A15までは30m程とかなり距離がある。この間での発掘はできなかつ

たが、トレンチ内では当該期に相当する遺構が顕著に認められなかったことから、板塀に付随する遺構の広がりはこの30mの間にある可能性が高い。すなわち旧奈良街道に接するようにして板塀に囲まれた建物群があったのである。時期は柵列の柱穴より出土した瓦器碗から概ね中世期と想定しておく。前述したように調査地の東、旧奈良街道沿いの東に能化院が存在する。本尊は地藏菩薩坐像で鎌倉期に比定される。現在みる能化院の境内は非常に狭い。が、本来はかなり広い境内地を有する寺であり、当地も最近まで能化院の所有地であった。今回見つかった板塀に囲まれた範囲は、能化院に関連する可能性が高いと思われる。

VI期 土壌S K10が挙げられる。土壌内より出土した軒丸瓦の文様は輪宝文を表現したものであり、同文例は管見の限り、伏見城跡しかない。この瓦も前段階同様能化院との関係が想定され、興味深い。おそらく織豊期のものであろう。

B 和同開珎の問題

今回の調査で最も注目され、かつ最もその性格を理解できないのが、トレンチ東側で検出した和同開珎を底部に付着して出土した壺である。宇治市で和同開珎は初出例と同時に土器に銭を埋納する風習が明らかとなった最初の例でもある。出土状況が前述したように遺構に伴って出土していないが、土器の状況等からみてそれほど流動的ではないと判断される。土器に銭を埋納するのは、何かを意図しその効果を期待した意識をもった所産であろう。これまでの研究成果から、この意識は大きくは子供の無事な成長を期待したものか、もしくは土地に住まう神を鎮め工事の安全を祈ったもののどちらかとなる。前者は袍衣を銭等と土器に入れて地中に埋めた行為を示し、後者は地鎮祭において使用される地鎮具の一つとして把握される。袍衣が子供の胎盤であることから前者は私的意味合いが極めて強く、公的機関で出土することはまずないとい⁵⁾って良い。前者であればⅢ期の建物は私的建造物となり、高杯や建物の規模等からもかなり都すなわち中央の文化を許容することのできたそれ相当の氏族の姿が浮かび上がってこよう。その当否は今回の発掘調査で明らかにできないのは残念であるが、これが足掛かりとなって周辺部のさらなる調査によって具体化されることを期待しておきたい。

註)

- 1 「五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告』第3冊 1992 宇治市教育委員会
- 2 「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987 宇治市教育委員会
- 3 『古瓦図考』ミネルヴァ書房 1989
- 4 現在図工社に脂肪酸分析を依頼している。その結果で明らかとなる可能性もあるが、出土状況からは、杉山氏が述べられるように後世他の脂肪酸が入り込む余地も多分にあり、厳密に検討していく必要がある。杉山洋「考古学からみた土器埋納遺構の性格」『西隆寺発掘調査報告書』奈良市 1993
- 5 秋田城の外郭内で袍衣壺が検出されており、公的機関であっても中心部から離れた地域では検討を要するかもしれない。『秋田城跡—平成5年度秋田城跡調査概報—』秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所

B. 三室戸寺子院跡発掘調査概要

(菟道奥ノ池13-1)

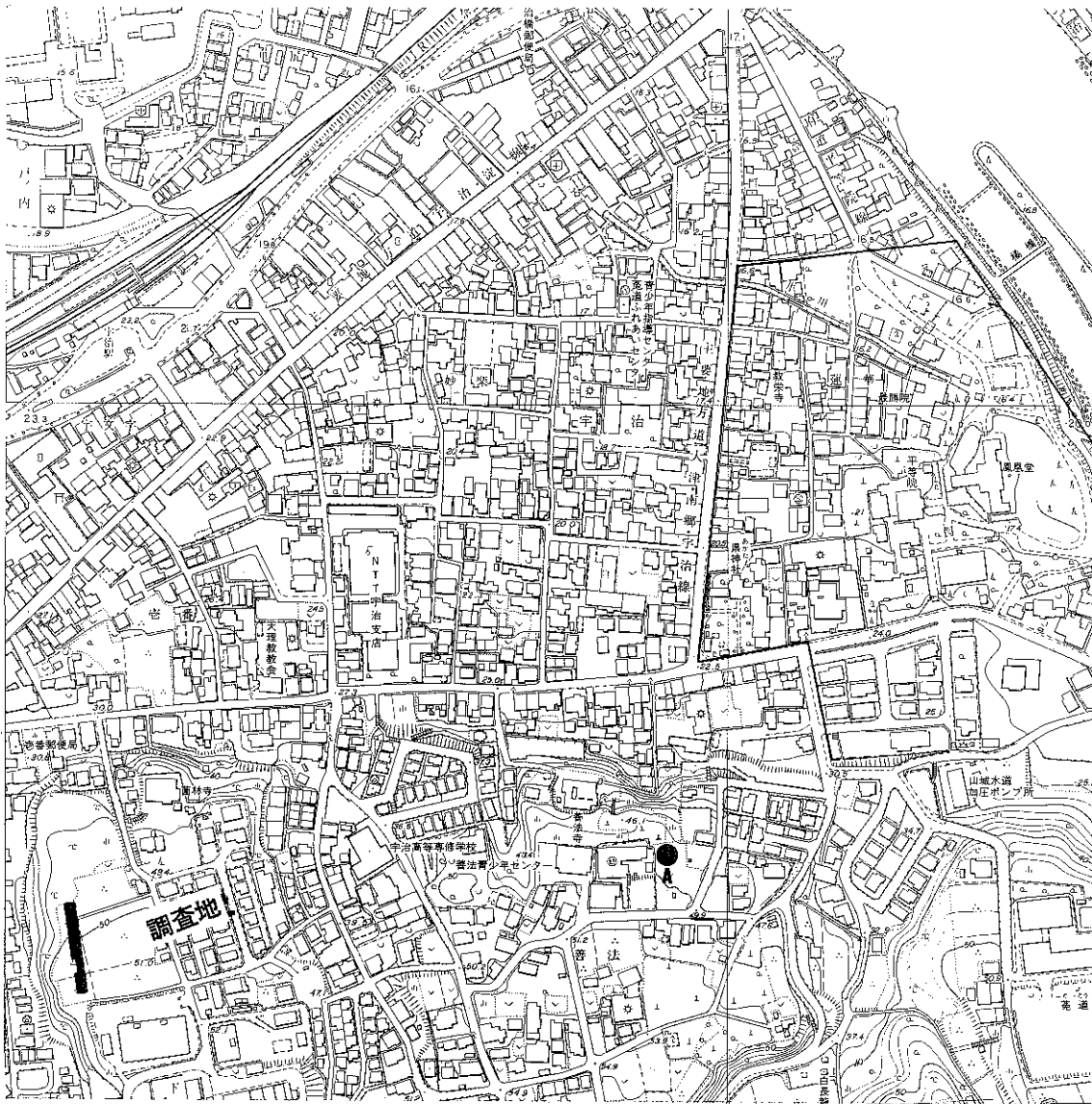
C. 下居遺跡発掘調査概要

(宇治下居79)

I. はじめに

本報告は、宇治下居79番地において実施した、共同住宅建設に伴う下居遺跡の発掘調査の概要である。

下居遺跡は、宇治市街の南にある段丘上の遺跡である。この段丘は、宇治川が形成した中位段丘で、宇治市街遺跡のある低位面とは約15mの比高を持った段丘崖となっている。段丘縁辺部は、谷の開析による起伏はあるものの、概して広い平坦面が見られる。昭和61年版の宇治市遺跡地図の段階では、この段丘上には今回調査した下居遺跡が古瓦出土地として記載されているのみであるが、その後の調査で、和鏡や白磁の椀・皿・合子・鉄釘が、戦後間も



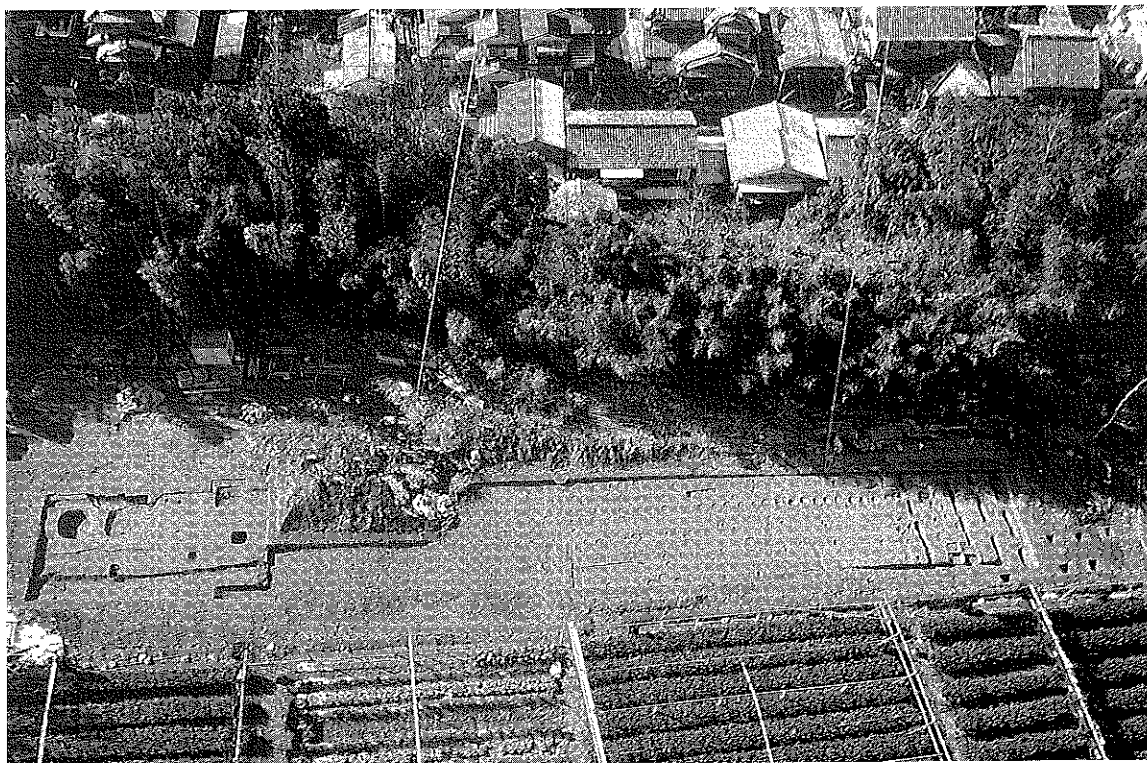
第1図 調査地位置図(2,500分の1)

ない頃善法付近で出土していることがわかり、善法古墓と名付けられた。¹⁾ 古墓の正確な位置は不明だが、調査地の東方にある善法保育所付近と推定されている。(第1図A) また調査中の聞き取りによれば、本調査地東隣の茶畑からは、かつて耕作中に円面硯が出土したと言う。このことから段丘縁辺部には広範囲に古代から中世の遺跡が広がっている可能性が考えられる。

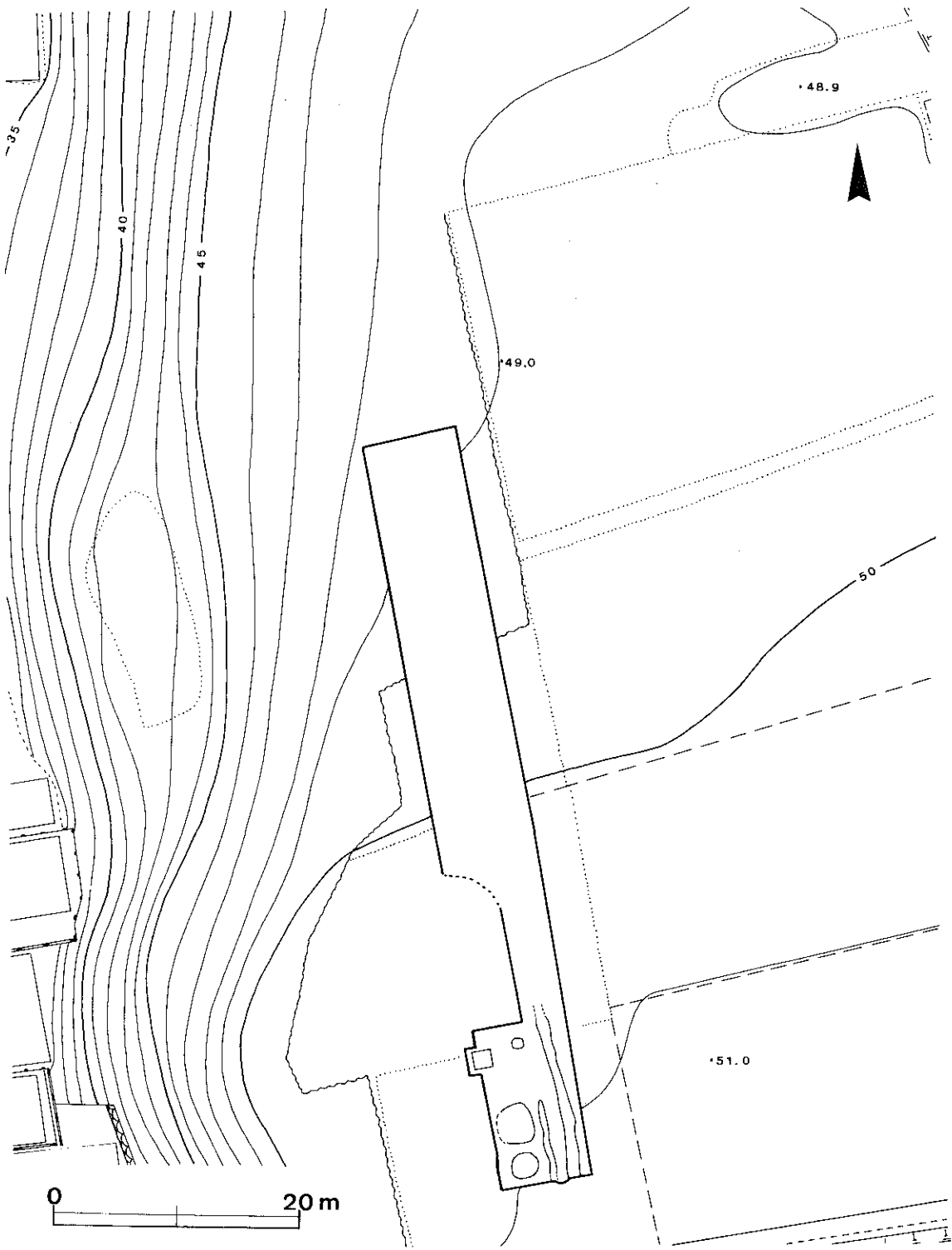
次に調査地の東方にある善法寺は、かつて平等院の一子院であった善法堂を、近世の段階に寺としたとされており、当地と平等院が深い関係にあったことが窺われる。

さらに伝承では、この段丘上に「山の井」という湧水点があったとされ、「山の井」は「山名井」の転訛したものだと言²⁾う。この「山名」は、明徳2年(1391)に明徳の乱で討たれた山名氏清の別業があったためとされている。山名氏清の宇治の別業は、氏清が將軍足利義満を紅葉見物に招いた場所であり、この時に氏清は義満に背いて挙兵に至ることとなる、歴史的にも重要な場所である。しかし、現状では建物や土塁などの痕跡を示すものは、発見されていない。

以上のように、下居・善法にかけての段丘上には、様々な遺跡や伝承があることがわかってきた。今回の調査地は、この段丘の西端にあたり、西に折居川が開析した谷をのぞみ、北に宇治の市街地をのぞむ位置にある。調査は平成7年11月21日から12月27日まで行い、調査面積は422㎡である。



第2図 トレンチ全景



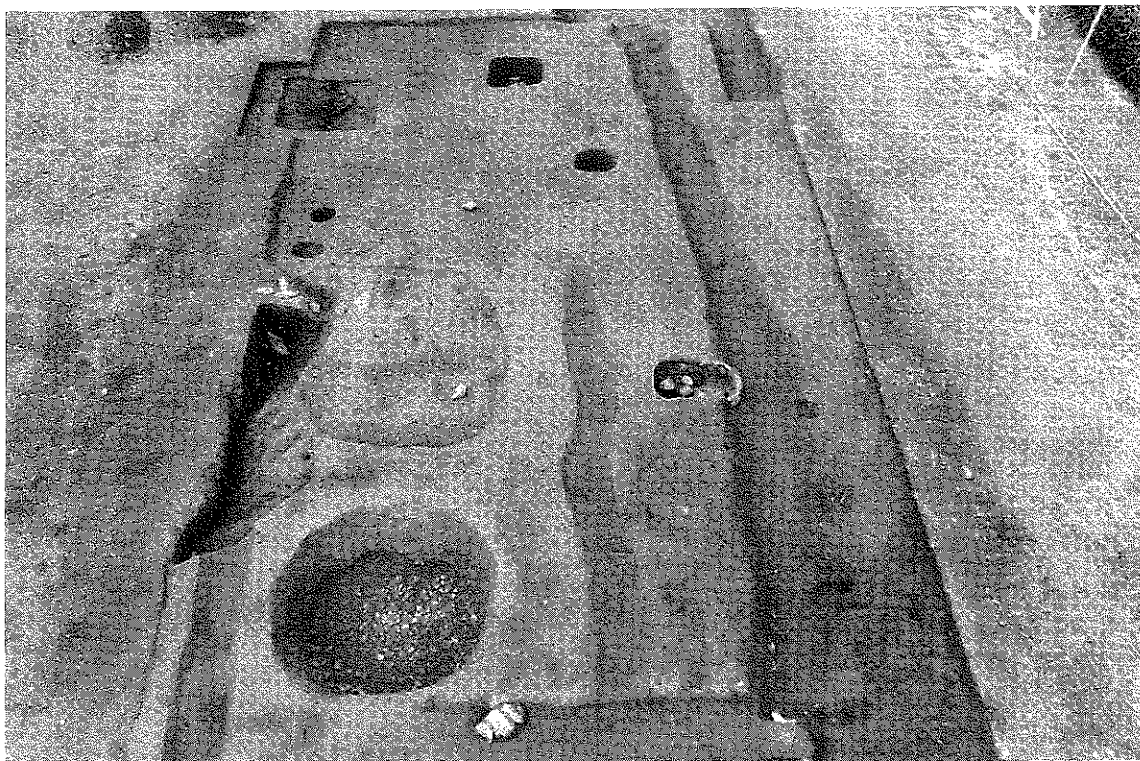
第3図 トレンチ実測図

Ⅱ. 検 出 遺 構

調査は、敷地が南北に長いので8 m×60mのトレンチを設定して重機による掘削を行った。途中トレンチの中央部では、耕作による攪乱が激しく、一部幅を狭めた。掘削の結果、トレンチ北半部では耕作によって遺構面が削平されており、茶の木を植えた痕跡のみがあることがわかった。南半部では、かなりの削平は受けているものの、中世から近世の遺構が残っていることがわかり、南半部を中心に調査を行うこととなった。なお、遺構は表土直下で検出している。

今回の調査で検出した遺構には、土壇・溝がある。以下その概要を述べるが、遺構の位置はすべてトレンチ南半部の中での位置である。

土壇SK1 北部から検出した土壇である。東西0.95m、南北0.83m、深さ約0.6mを測る方形の土壇である。ほぼ垂直に掘り込まれている。土壇内から鉄釘が出土しており、木箱のような容器に火葬骨を埋納した土壇墓と考えられる。また土壇上層から瓦質製品が出土している。これは瓦質の円筒形のもの四方に印仏を押し付けたもので、縦にほぼ半分に分かれたものが、上部を下にし、土壇北側から転落した状態で出土している。出土状態から判断して、土壇の北側に据えられたものが、容器の腐食により埋土が崩落し、土壇内に転落したものだと思



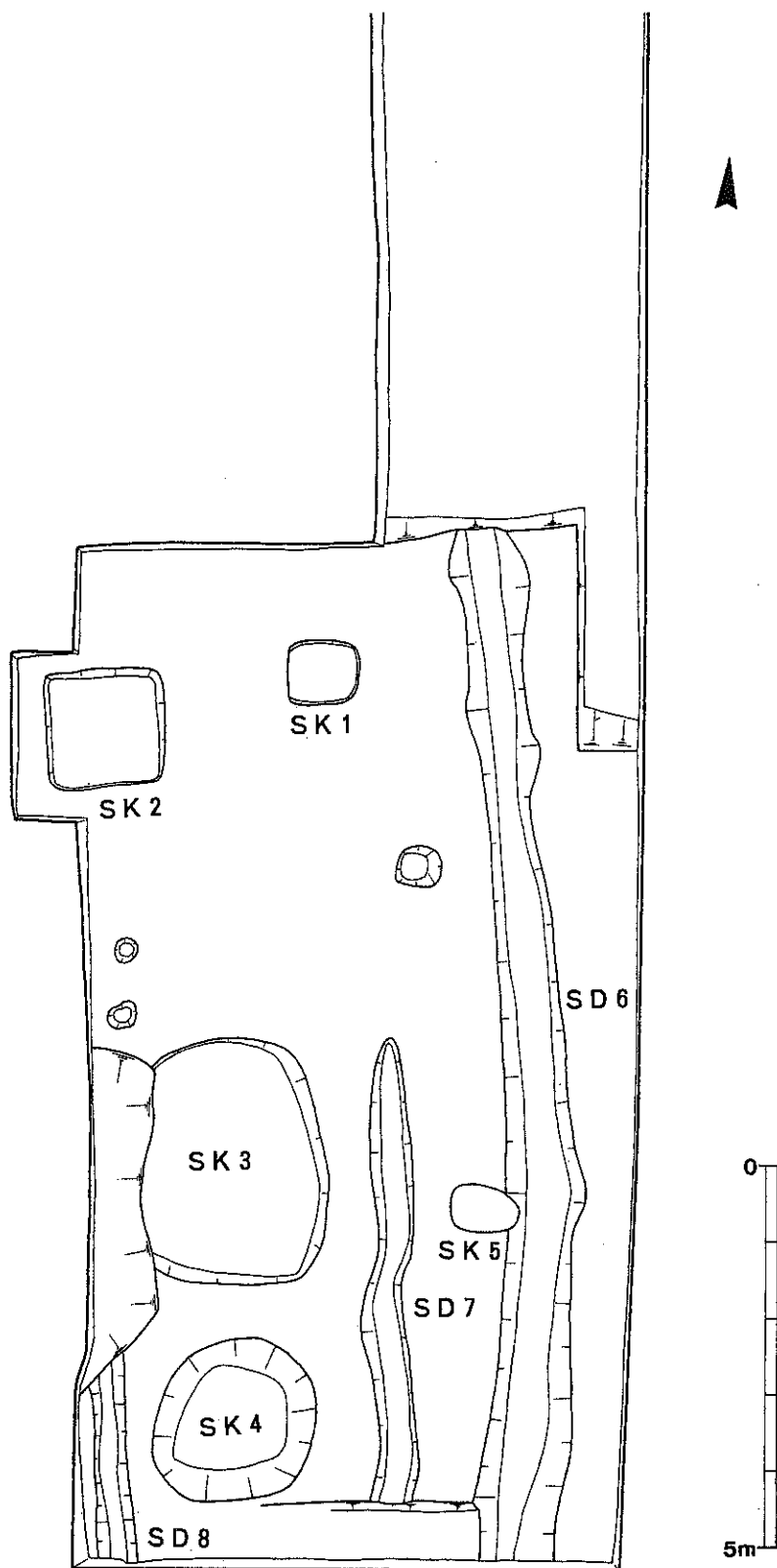
第4図 トレンチ南部全景

われる。なお、この瓦質印仏の詳細は遺物の項で述べるが、本来は宝塔であったものを転用して、墓に供えたものと考えられるが、管見の及ぶ限りでは類例がなく、性格・時期ともに不明である。

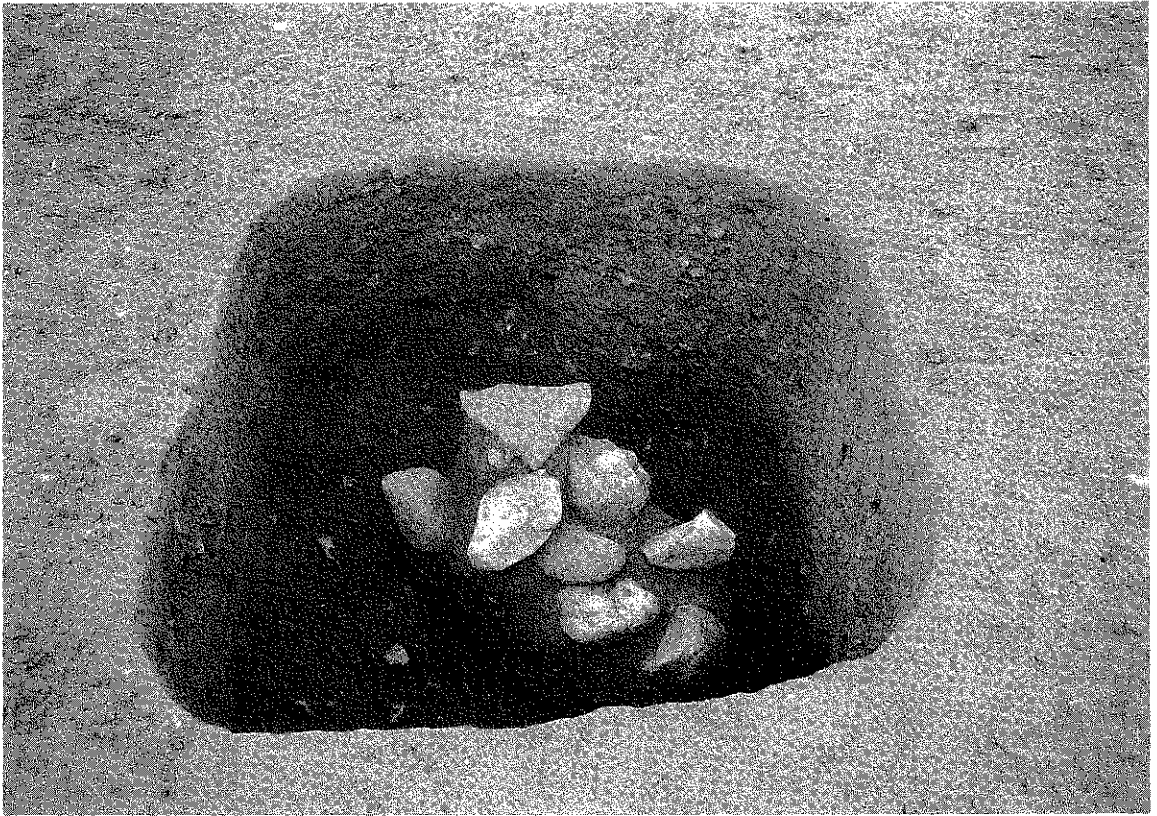
土壌SK2 土壌1の西にある土壌である。南北1.55m、東西1.5mの方形の土壌である。土壌の中央の南北方向に幅25~35cm、深さ約10cmの溝が掘られており、土壌の底面はこの溝に向かって緩やかに傾斜している。土壌の底面を、炭や骨片を多量に含む黒褐色土が10cm程度の厚さで覆っており、一部に焼土も残る。検出した状態から見て、火葬土壌である可能性が高い。

なお、土壌内からは、土師器皿1点、鉄釘1点、至和通宝（1054年初鑄）、元豊通宝（1078年初鑄）各1点と不明銅銭2点、火葬骨片多数が出土している。

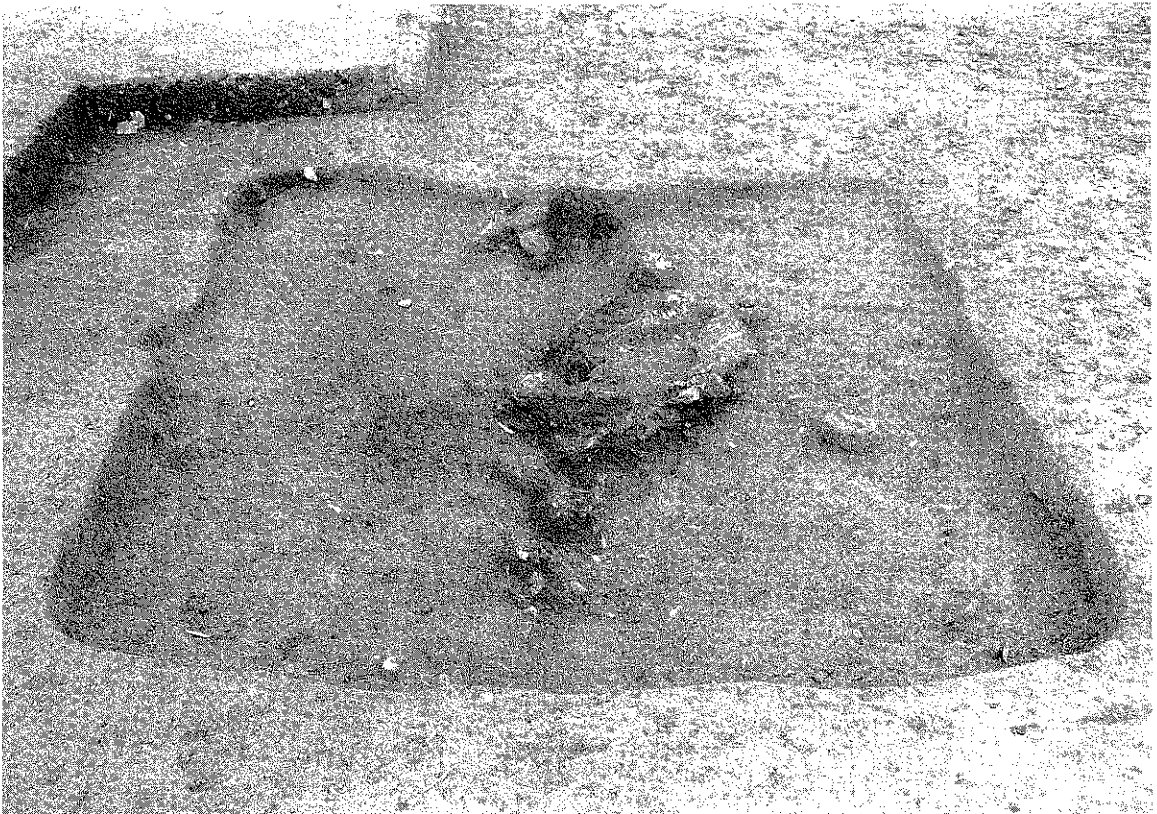
時期は、出土した土師器の皿から、15世紀と考えられる。



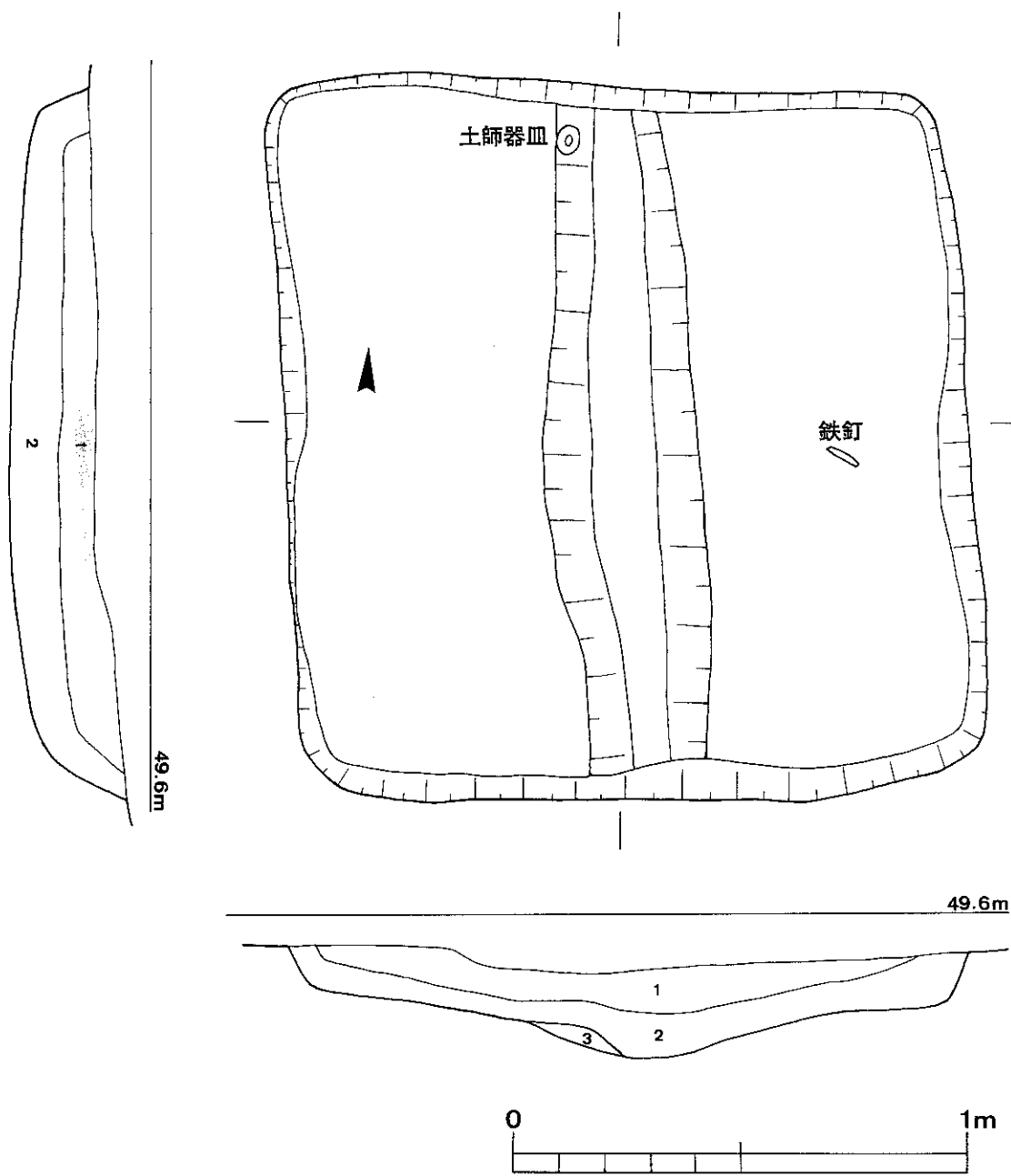
第5図 トレンチ南部実測図



第6図 土壌SK1



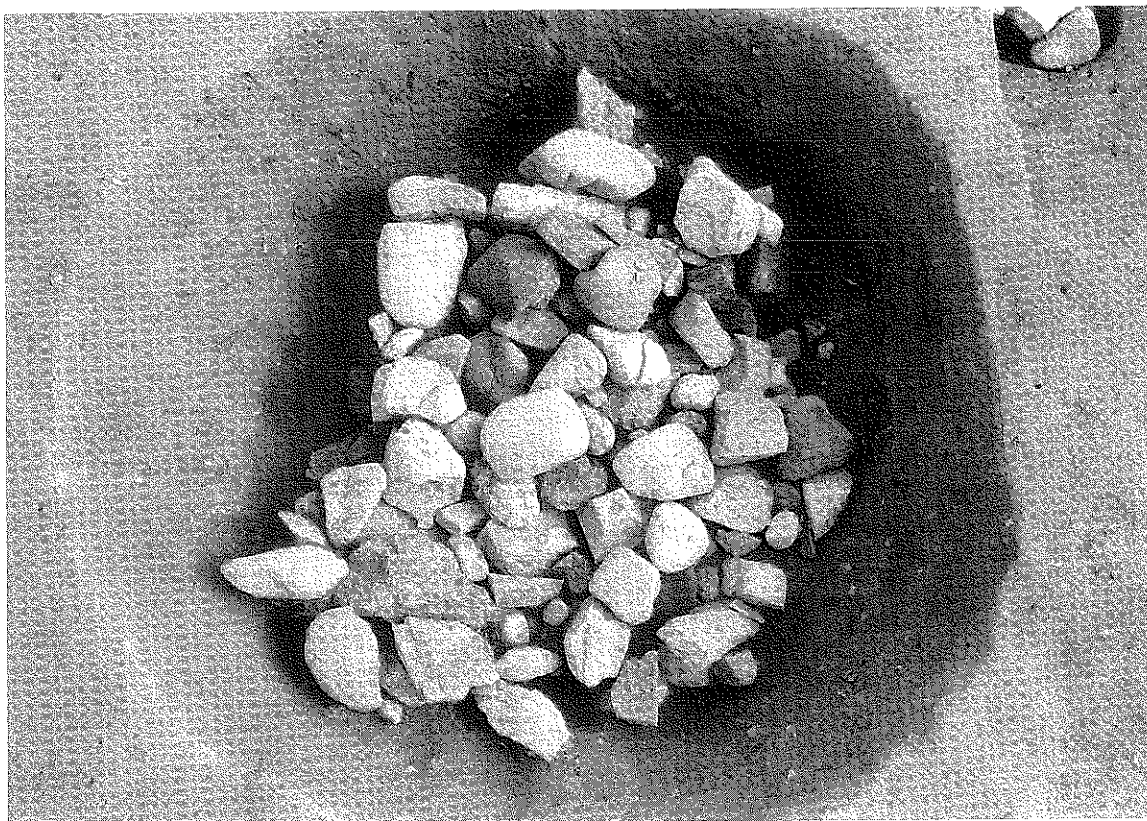
第7図 土壌SK2



1. 暗赤褐色土 2. 黒褐色土（炭、骨片多量に含む） 3. 焼土
 第8図 土壙SK2実測図

土壙SK3 土壙SK1・SK2の南方にある土壙である。南北3.2m、東西2.5m以上、深さ0.2mの楕円形の土壙である。西辺を攪乱により削られている。土壙内からは火葬骨片が出土している。時期・性格は不明である。

土壙SK4 土壙SK3の南にある直径約2.1mのほぼ円形の土壙である。深さは約0.6mを測る。土壙底には多数の礫が集積しており、その中には石仏4体・五輪塔の宝珠4点・笠1点も含まれる。また軒瓦・信楽焼の大甕片・火葬骨片も出土している。軒瓦は、河内系のものである。おそらく近世の段階に耕作の邪魔になる礫を、一括して投棄した土壙ではない



第9図 土壙SK4

かと考えられる。

土壙SK5 土壙SK3の東方にある卵形の土壙である。東西0.9m、南北0.6m、深さ0.3mを測る。土壙壁面を漆喰で塗りかためており、中からは棧瓦が出土している。近世の遺構である。性格は不明である。

溝SD6 トレンチ東部で検出した幅約0.9m、深さ約0.2m、検出長13.5mの南北溝である。墓域を区画する溝である可能性が考えられる。溝内の南端で、土師器の皿に火葬骨片を乗せた状態で出土している。検出した位置は、溝の検出面に近い位置である。これも埋葬の一形態であろうか。

溝SD7 溝SD6の西側で検出した南北溝である。幅約0.5m、深さ約0.1m、検出長6.1mを測る。時期・性格は不明。

溝SD8 トレンチ南東隅で検出した南北溝である。幅約0.4m、深さ約0.15m、検出長2.6mを測る。時期・性格は不明。

Ⅲ. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、コンテナ箱にして2箱分であり量的に少ない。遺跡の性格上、大半が墓関連の遺物である。時期は平安後期から江戸期までである。

瓦質宝塔塔身部（第10図、13図14）

円筒状を呈し、下端部が大きく外側に張り出すものである。全体的にいびつな形態であるが、概ね上端部で外面直径20.4cm、下端部で外面直径22cmを測る。高さは27.8cmを測る。内面には布目痕がみられ、下半部はナデにより仕上げが行われている。外面には版押し3)の陽刻仏が施されており、その残存状況から四方にそれぞれ異なった仏像が配されていると思われる。その内、全体が分かるのは一体で、阿弥陀如来坐像である。形態から判断すればこの遺物は経筒の筒部に酷似する。しかし、経筒の筒部に四方仏を配する例はみられないようである。ここで、滋賀県の石居廃寺出土の宝塔形式の泥塔4)を参考として挙げておく。出土した泥塔には、その塔身部に四方仏が配されているのである。平安後期という。現状ではとりあえず、宝塔の塔身部分として想定しておきたい。

瓦（第11図1、13図1）

中心飾から唐草文が4反転するもので、外区には圈線が巡る。緩やかな曲線顎で、凸面に布目痕、凹面平瓦部に縄叩き痕がみられる。瓦当厚4.3cm、顎幅2～2.3cmを測る。胎土は砂粒を多く含む。河内系。12世紀。



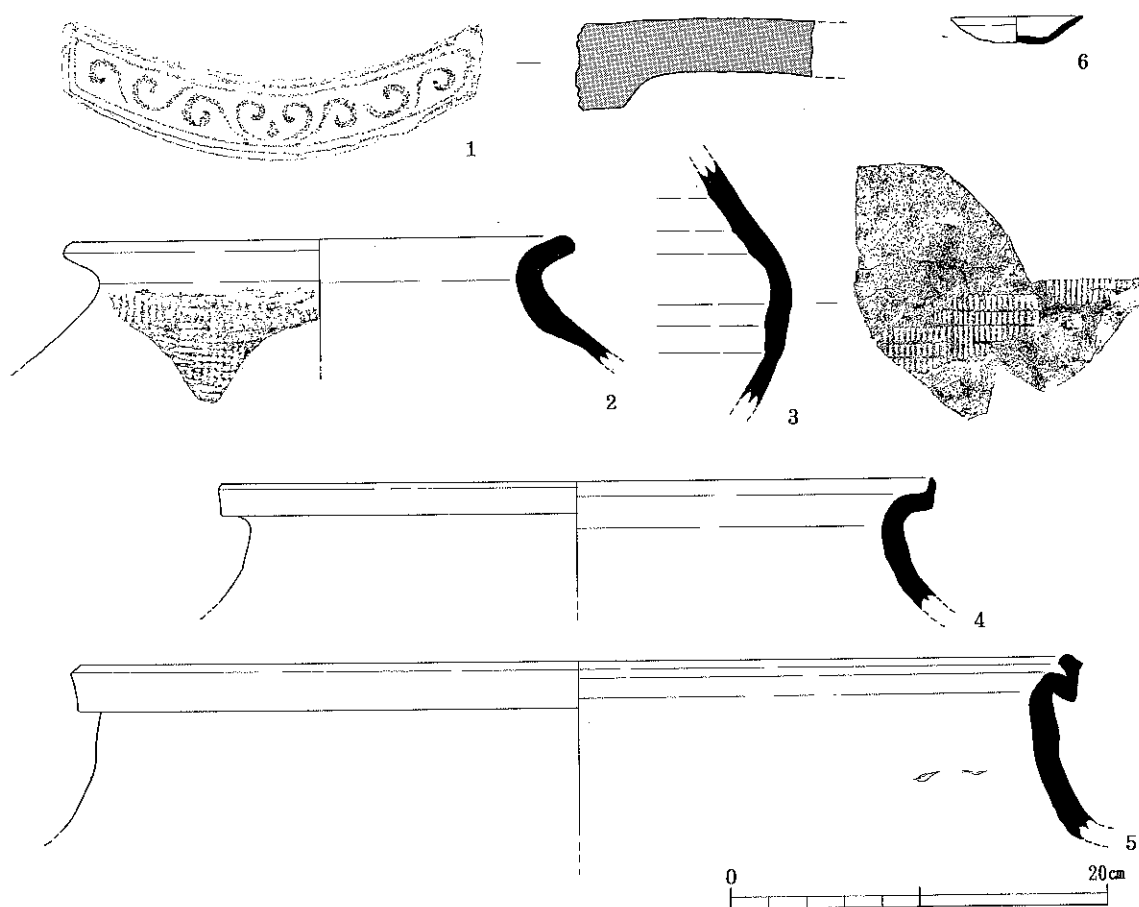
第10図 瓦質宝塔塔身部・塔身部外面に陽刻された仏像拓本

土器（第11図2～6）

土器については細片が多いため図化できるものは極めて少ない。種類として甕・土師皿・瓦器椀がある。おそらく甕は蔵骨器、土師皿・瓦器椀は墓の副葬品ないしは供献土器として使用されたのであろう。土師皿（6）は口径約7cmの緩やかに外反する口縁部をもつものである。器高約1.5cm。淡褐色。16世紀。甕は須恵器甕と常滑甕の2種類に分別される。須恵器甕（2）は、口縁部が緩やかに外反するもので、端部は面を有する。外面には体部から口縁部にかけて格子叩き痕がみられる。常滑甕は、口縁部断面がL字状を呈するもの（4）とN字状を呈するもの（5）とがある。（3）は甕の肩部で、押印文がかなり密に施されている。常滑甕についてはその諸特徴より13世紀中頃から後半にかけてのものと考えられる。

石仏（第12図7～10）

4個体出土しており、いずれも阿弥陀如来坐像を刻む。大きくは屋形を有するもの（7・9）と無いもの（8・10）とに分別され、前者はいずれも船首を上方に向けた舟形状を呈するものである。7は残存高32.5cm、幅17.5cm、厚さ10.5cmを測る。花崗岩製。8は残存高29.7cm、幅31cm、厚さ10.5cmを測る。花崗岩製。9は残存高35.5cm、幅21cm、厚さ10.6cmを測る。



第11図 出土遺物実測図



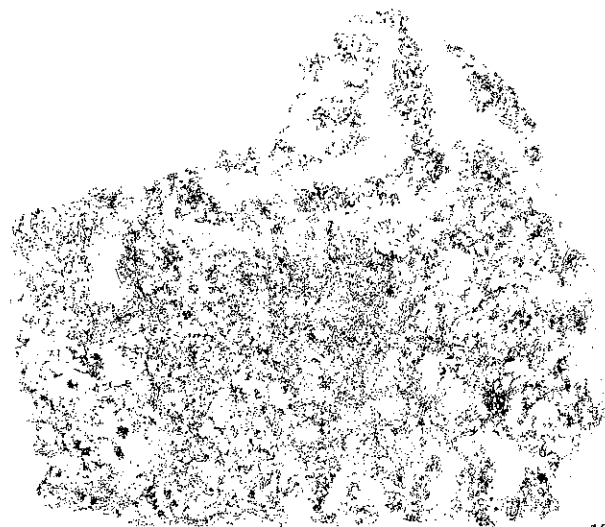
7



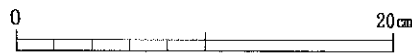
8



9



10

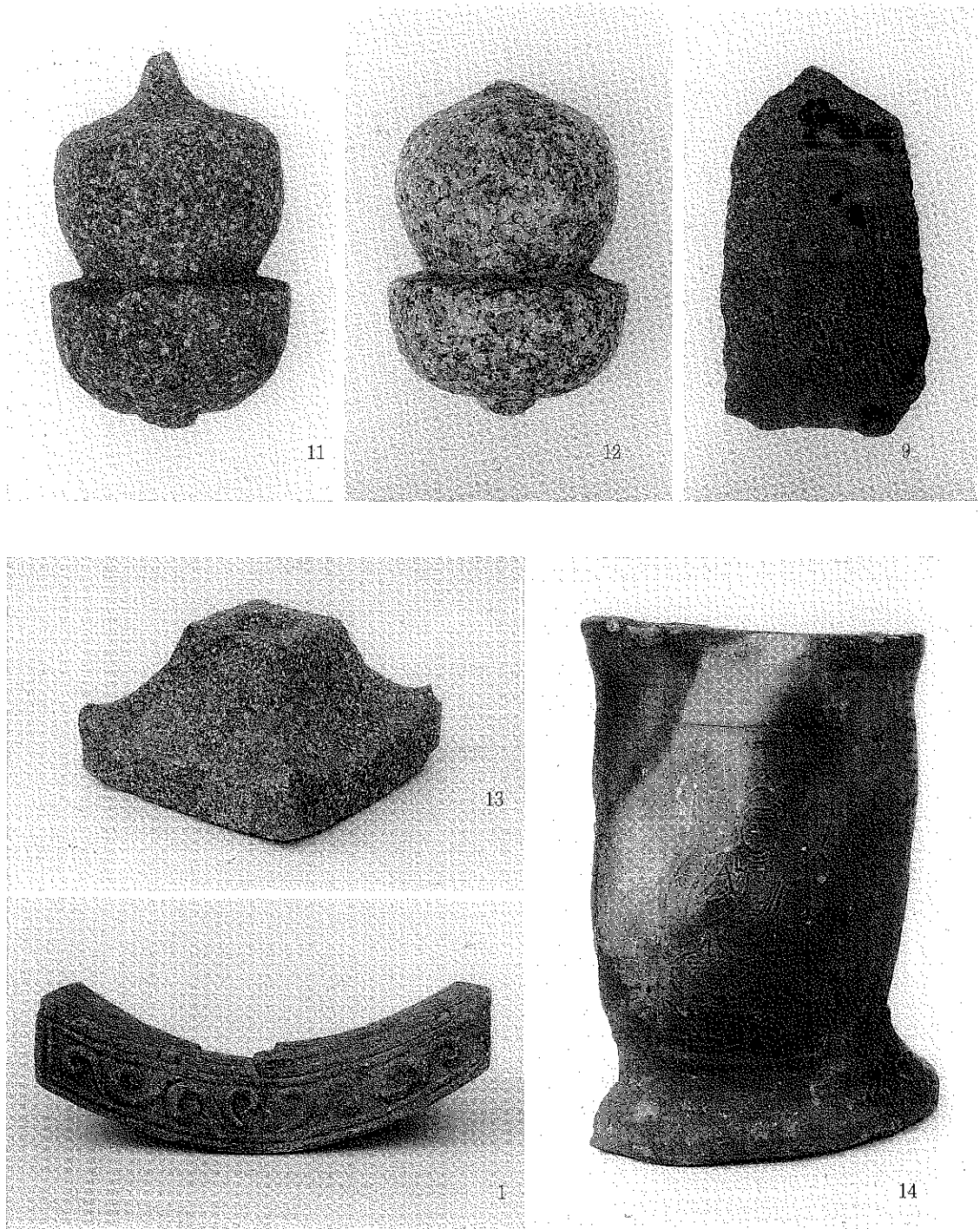


第12図 石仏拓本

背面には加工痕が明瞭に残る。砂岩製か。10は残存高37.4cm、幅19.7cm、厚さ13cmを測る。花崗岩製。

五輪塔（第13図11～13）

五輪塔は空・風輪部が4点、火輪部が1点出土している。法量、形態いずれも異なり、梵字の陰刻がみられない。空・風輪部については写真掲載のもののみ説明する。11は空・風輪高19.2cmであり、空輪幅12.1cm、風輪幅13cmを測る。12は空・風輪高16.9cmであり、空輪幅



第13図 出土遺物

12cm、風輪幅13.3cmを測る。火輪部（13）は高さ11.4cm、軒幅18.4cmを測る。軒先の隅の反りはきつく、垂直に立ち上がる。

IV. ま と め

今回の調査では、土墳墓・火葬遺構などを検出した。実際に検出した明確な墓は1基しかないが、遺物の状況から判断すれば、かなりの数の墓が、調査地ないし周辺にあった事が推測される。また遺物の時期から見ても、13世紀代から江戸時代初頭に至るかなり長い期間、当地は墓域として利用されていたことが窺われる。遺物量から見れば、特に室町時代にピークをむかえているものと思われる。

それでは、こうした大規模な墓地が成立した背景はどのようなものだったのであろうか。それを知るには、眼下に広がる宇治市街遺跡との関連を見なければならぬ。

平安時代の宇治には、平等院を初めとする藤原氏などの別業が数多く造られた。これらの別業は、現存する平等院以外はまだほとんど調査が行われておらず、その実態は不明といわざるを得ないが、現在の県通り・本町通り・宇治橋通りに囲まれた三角形の地域にその多くが営まれていたと推定されている。そしてこれらの別業は、街路によって区画され、白河や鳥羽などと同様に宇治街区ともいべきものが設定されていたとする指摘もある⁶⁾。しかしこれらの別業も、藤原氏の凋落と共に平安時代末期から鎌倉時代にかけて、姿を消していったものが多いようである。

この時期を境にして、宇治市街遺跡では遺物の出土量も増え、民衆の「町」としての色合いを強めていく。特に室町時代に出現したと考えられている番保の存在は、大山崎油神人の保と同様に、宇治においても活発な商業活動が行われていたことを推測させる。文献からは、麴座・魚屋などが知られているにすぎず、どの程度の商業活動が行われていたかはわからないが、昭和59年度に行われた宇治市街遺跡の発掘調査にその一端を見ることができる⁶⁾。調査地点は宇治橋通りと本町通りの交差する、今回の調査地の段丘崖下にあたる。ここでは油を入れたと考えられる大甕が20基埋められており、大量の油を商う油商人の存在が推測された。

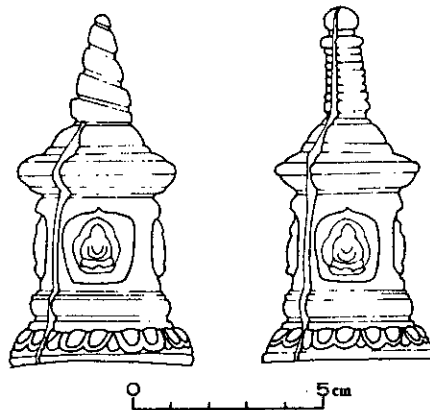
このように宇治市街遺跡では室町時代を一つのピークにして、「町」が形成されていたことがわかってきたが、この動きは下居遺跡における墓地の形成の動きと同じものと見ることができる。さらに今回発見された墓あるいは墓の存在を示唆する遺物からは、墓の多くが火葬墓であることが推測でき、ある程度の富裕者層の墓域と見ることができる。つまり下居遺跡と宇治市街遺跡との関係は、居住域と墓域との関係なのである。

今回の調査では、調査地の大半がすでに削平を受けており、遺構を検出した部分のごくわずかな面積であったが、宇治市街遺跡を中心とする中宇治の地域を理解するための良好な資料が得られた。今後は、中世墓2基を確認し下居遺跡と同様に宇治市街遺跡との関連が深い

と考えられる野神遺跡も含めて、地域を空間的に把握する研究が必要となってこよう。

註)

- 1) 八木隆明・杉本宏「宇治市善法古墓の鏡と輸入陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第23号 1987 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 『宇治市史』6 1981 宇治市
- 3) 京都国立博物館の伊東史朗氏、難波洋三氏、宮川禎二氏、久保智康氏のご教示を得た。記して謝意を表します。
- 4) 林博通「石居麿寺」『近江の古代寺院』 1989



石居麿寺出土の泥塔（『近江の古代寺院』より抜粋）

- 5) 杉本宏「宇治橋架橋位置変更と宇治街区の成立」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集 1994 宇治市教育委員会
- 6) 「宇治市街遺跡第2次発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第8集 1985 宇治市教育委員会

D. 宇治神社遺跡発掘調査概要

(宇治又振37他)

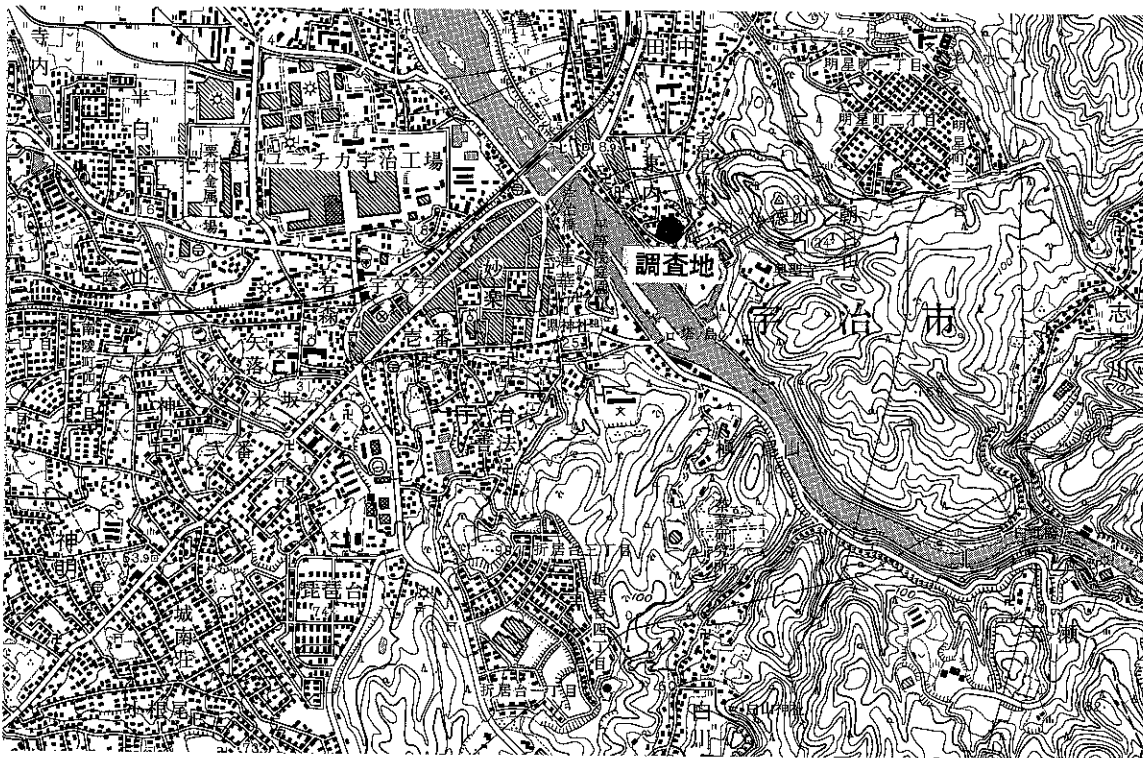
I. はじめに

ここに報告をするのは、宇治市宇治又振37他において実施した宇治神社遺跡発掘調査の成果概要である。

宇治神社遺跡はその名が示すように宇治神社を中心に展開把握される遺跡である。本遺跡については、これまで考古学的調査がなかったことから、地中に埋蔵される遺跡の内容については不明であった。しかし、遺跡の周囲には、重要文化財の拝殿をもつ宇治神社、昨年度に世界遺産に登録された宇治上神社が鎮守することからも、地中に埋蔵される遺跡の存在は十分予測された。発掘調査地点は、宇治神社の北隣接地で、その北西約100mに宇治上神社が鎮守する。南に100m程いくと、宇治川が南東から北西方向に流れており、中洲の塔の島には鎌倉後期に宇治橋を再興させた西大寺僧叡尊の建てた日本最大（高さ15.2m）の十三重石塔、そして対岸には世界遺産に登録された平等院が存在する。

今回の調査は、当初は浄化槽埋設に伴う立会調査であったが、遺構の状況が極めて良好に検出されたことから、事業者のご協力を得て発掘調査に急速変更し調査を行った。

発掘調査期間は平成7年6月29日から同年7月5日までで、調査面積は12㎡である。



第1図 調査地位置図 (1:25,000)

Ⅱ. 位置と環境

A. 位置と環境

宇治は、平安京（京都）の巽（南南東）にあたり、琵琶湖から発した宇治川が山間を縫って平野部に流れ出す所に位置する。

調査地は宇治川が山間より流れだす谷口部の右岸の微高地上（標高約25m）に位置する。調査地の南に眼をむければ、そこには宇治川の悠久の流れ、対岸に平等院と宇治の町並、その東側には標高100m程の丘陵が連なり、一つの美しい情景をみることができる。

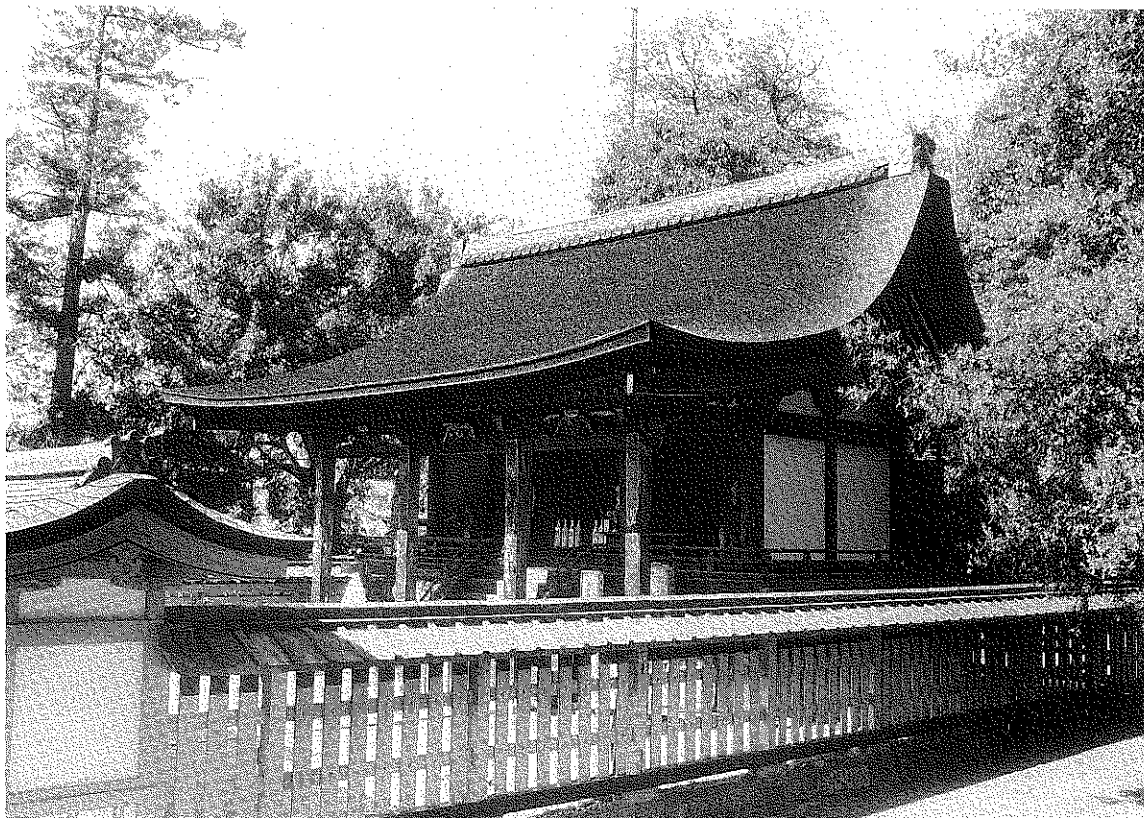
調査地背後には、標高132m程の仏徳山（大吉山）をはじめとして山々が連なり、その麓に宇治上神社、宇治神社が鎮守する。この山より流れる山水は、宇治上神社境内に湧き出ており「桐原水」と呼ばれる。「宇治七名水」の一つにあたる名水で、今もなお「お茶席」等に利用されている。

宇治川谷口部に展開する遺跡は、右岸部では弥生時代中期の乙方遺跡が最も古く、竪穴住居や方形周溝墓、土器棺等が見つかっている。仏徳山の北麓山丘上には古墳時代中期の宇治二子山古墳が存在する。左岸部でも平等院下層に古墳時代前期から奈良時代の集落が展開している。また平等院境内地の発掘調査で白鳳後期に比定できる法隆寺と同範の軒丸瓦が出土しており、宇治橋関連施設の存在が想定される。平安時代になると、左岸部では平安初期から源融を始めとして、貴族の別業が造営され始める。平安中期には藤原道長の別業を受け継いだその子頼通がその別業を寺院化し、平等院が創立される。その後、宇治は、この平等院を核として街区整備が形成されていったようである。

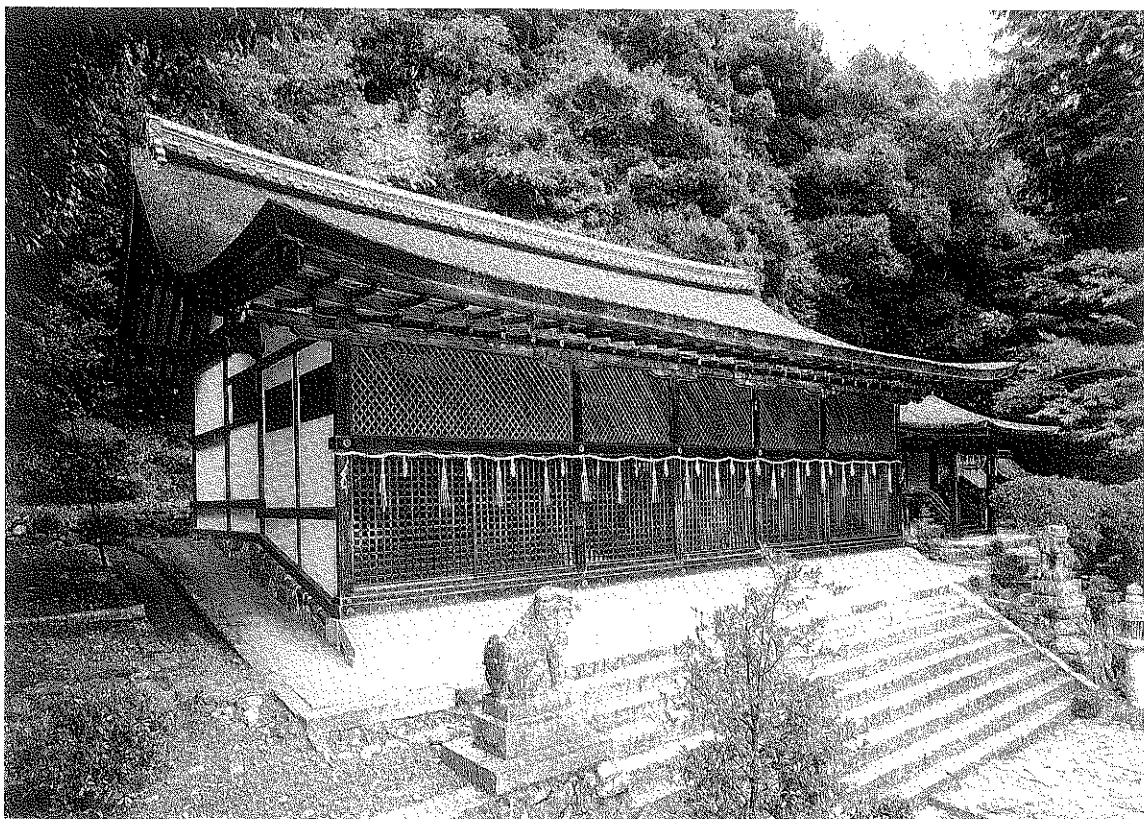
B. 宇治神社と宇治上神社

調査地付近に今もなお現存する建物に宇治上神社・宇治神社がある。「延喜式」に宇治神社二座として記され、また両社が後に離宮両社と呼ばれていることから、両社は古くより関係が深く、「延喜式」記載の宇治神社二座は、この両社を指していると考えられる。離宮の名の由来については、応神天皇の宇治離宮があったとする伝承に基づいており、また菟道稚郎子の宮伝承もみられる。

宇治神社は菟道稚郎子、宇治上神社は菟道稚郎子と応神・仁徳天皇を祭神とする。宇治上神社の建築は、国宝本殿（平安後期）、国宝拜殿（鎌倉初期）で、日本最古の神社建築として、昨年12月に世界遺産に登録された。また本殿の墓股は、建築史上最も優美なものとして名高い。宇治神社も本殿（鎌倉）が重要文化財に指定され、菟道稚郎子像（平安）も重要文化財に指定されている。

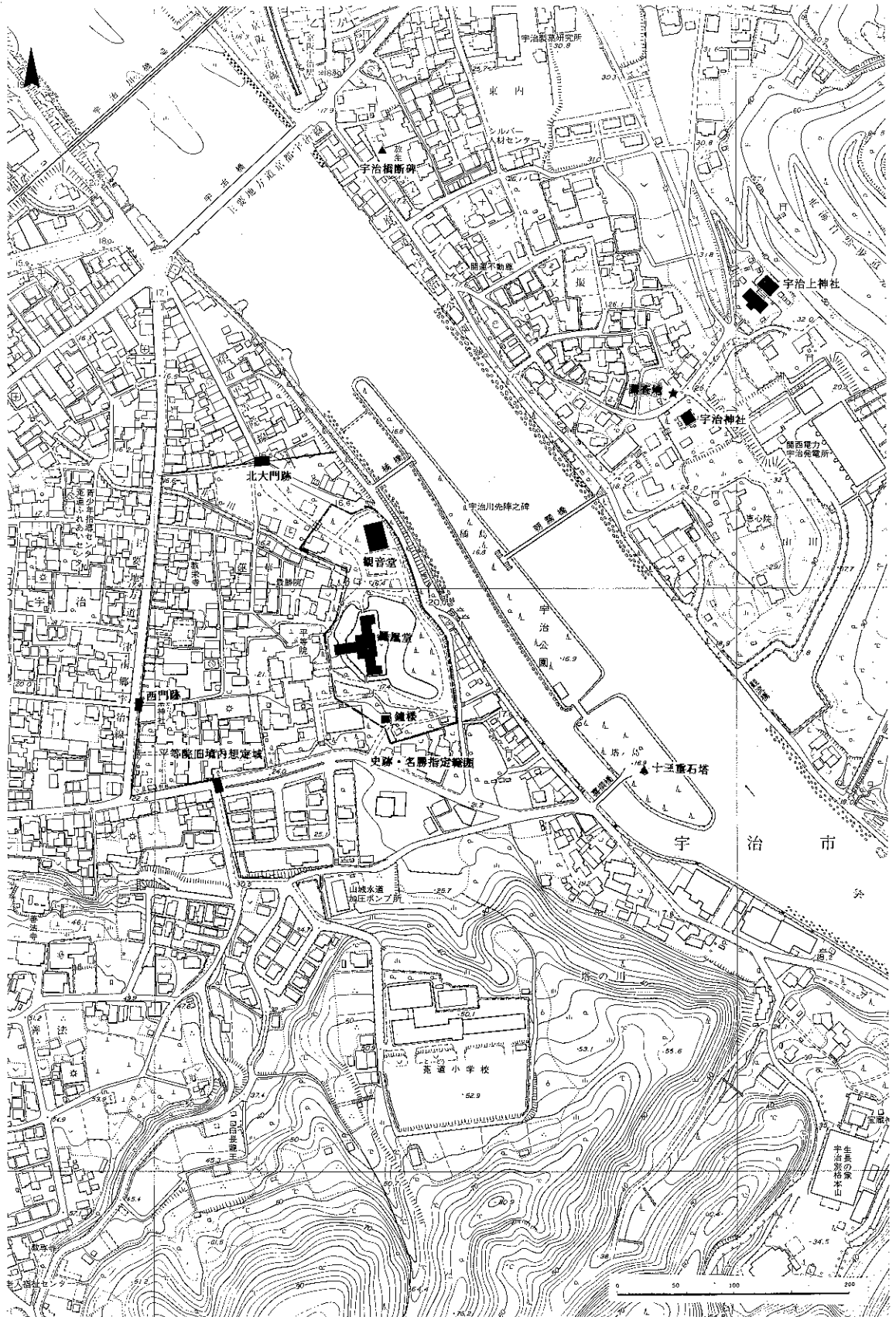


第2図 宇治神社本殿（鎌倉・重要文化財）



第3図 宇治上神社本殿（平安・国宝）

寿福 滋氏撮影



第4図 調査地周辺の状況図

Ⅲ. 検 出 遺 構

今回の発掘調査で検出した遺構は、現地表面下約2mで見つかった石敷遺構である。まず地表面から石敷遺構までの土層の状況について述べ、次に遺構全体の様相について述べていくこととする。出土遺物については、かわらけが1点出土したが、出土状況が判然としなため割愛する。

土層の状況

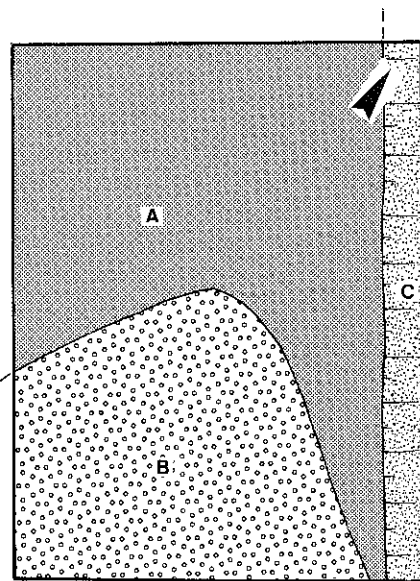
トレンチ南壁で土層を観察すると、現地表面から約1mまでが黒褐色土と黄褐色土層との互層をなし、その黒褐色土層中から宇治在郷瓦師の山田源左衛門作の軒平瓦¹⁾が出土した。この瓦から、この層は18世紀以後に埋められたものと考えられる。地元の話によると、宇治上神社の参道北側に沿う形で細長い谷があり、明治にその谷は埋め立てられたということである。調査地は調度その谷あいにあたることから、この互層は、その時期の埋土であると考えられる。さらに、石敷のある遺構面(地表下2m)までの間に水を多分に含む非常に崩れやすい青灰色シルト層が厚く堆積していた。この土層を取り去ると、石敷面が検出された。石敷の下層状況をみるために、トレンチ北西コーナー部を断ち割ったところ、石敷面は一面のみで、下層には再び水を多分に含む青灰色シルト層がみられた。

石敷遺構

トレンチ全体に石が充填された状況がみられたが、石の配置状況から、大きく礫敷平坦部(A)、岬状高まり部(B)、礫敷傾斜部(C)にわかれる。

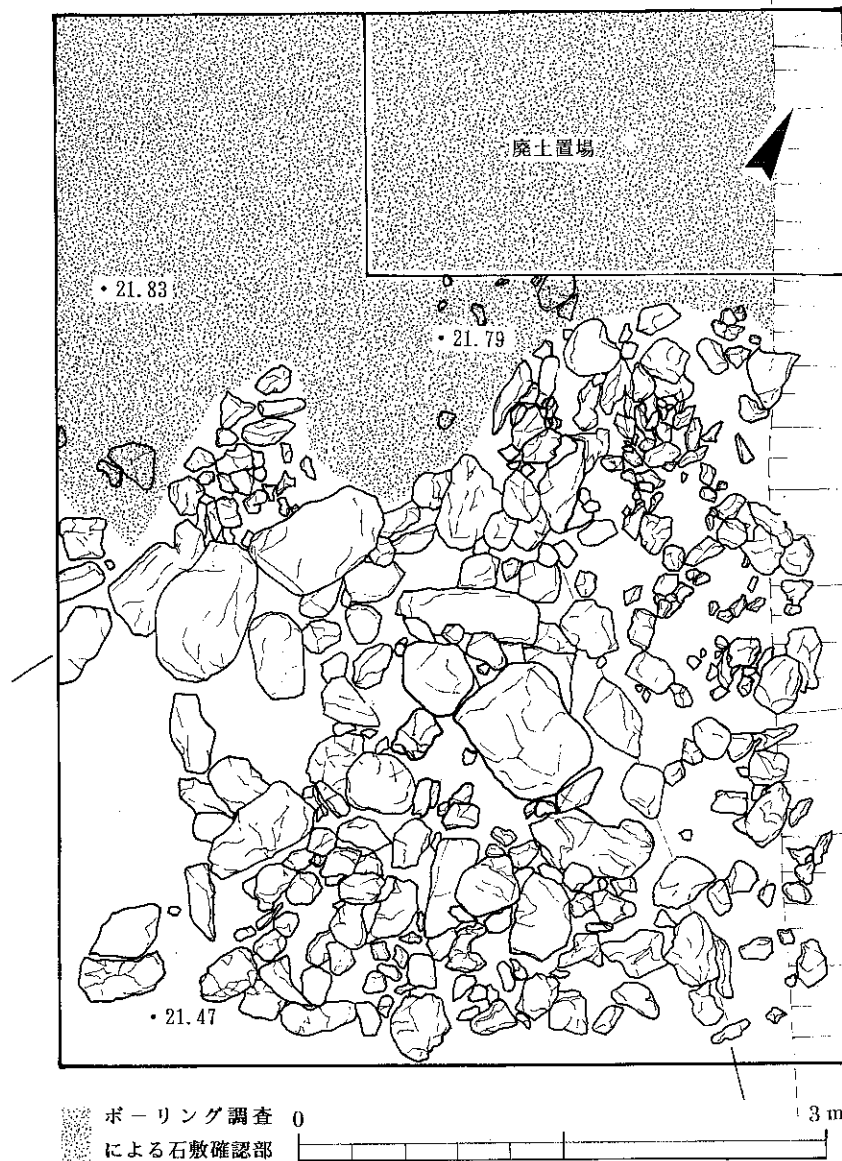
北西部にみられる石敷平坦部(A)は、調査上、調査地内すべてを検出することはできなかったが、ボーリング調査によって確認を行ったところ、後述する(B・C)以外の部分全体に広がっていた。石の大きさは基本的には傾斜部と同様拳大ぐらいである。石の配置状況は、規則的ではなくランダムに撒かれているという表現が適していよう。標高は約21.8mで、高さはほぼ一定である。ボーリング調査によって、石敷平坦部はさらに北東部にひろがっていくようである。

岬状高まり部(B)は、南から北側に向かって岬状に張りだしている。周辺より若干盛り上がる。後世による改変なのか、作庭当初よりまばらに石を配置しているの



A 石敷平坦部 B 岬状高まり部
C 石敷傾斜部

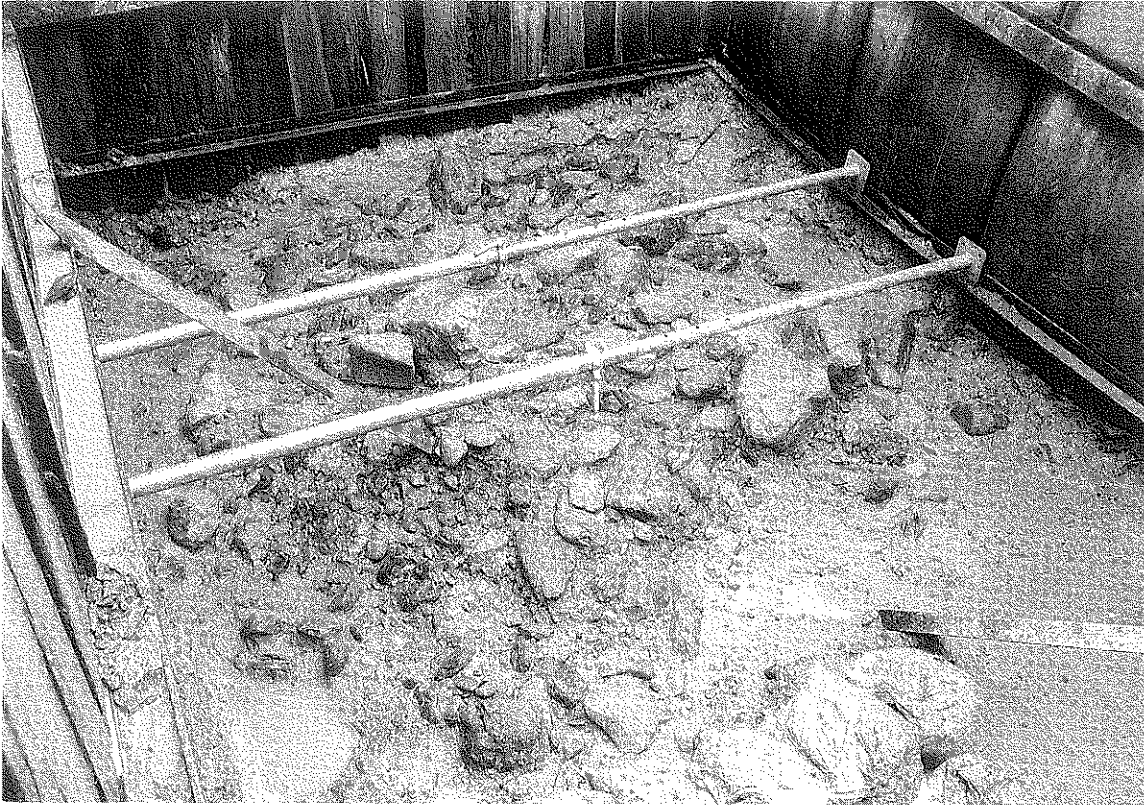
第5図 検出遺構模式図



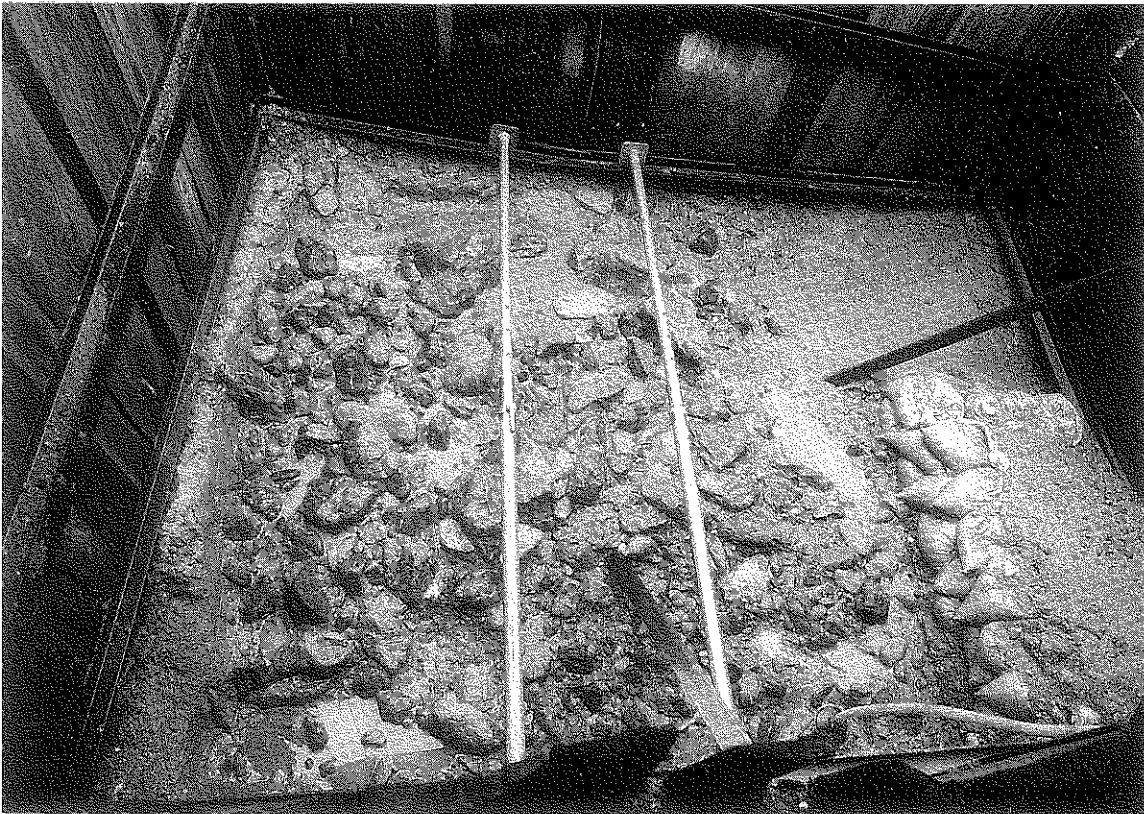
第6図 検出遺構平面図

かははっきりしないが、石の配置状況は極めてランダムである。石の大きさは不均一で、直径40~60cmのものや直径10cmと非常に小さいものまである。石敷平坦部と接する境界には、大きく均一な石を並べて配置したようである。高まり部の標高は約22.1mを示す。

礫敷傾斜部（C）は、トレンチ北東のトレンチに沿ってみられ（第9・10図）、東にある宇治上神社方面に向かって石の落ち込む様子が看守された。傾斜面の石は一部の確認にとどまったが、石の面が比較的そろっており、貼石状になっていると考えられる。石は、基本的には拳大の大きさである。



第7図 トレンチ東側遺構（島状高まり部）検出状況…北から



第8図 トレンチ東側遺構（島状高まり部）検出状況…東から



第9図 トレンチ北端遺構（石敷傾斜部）検出状況…北から



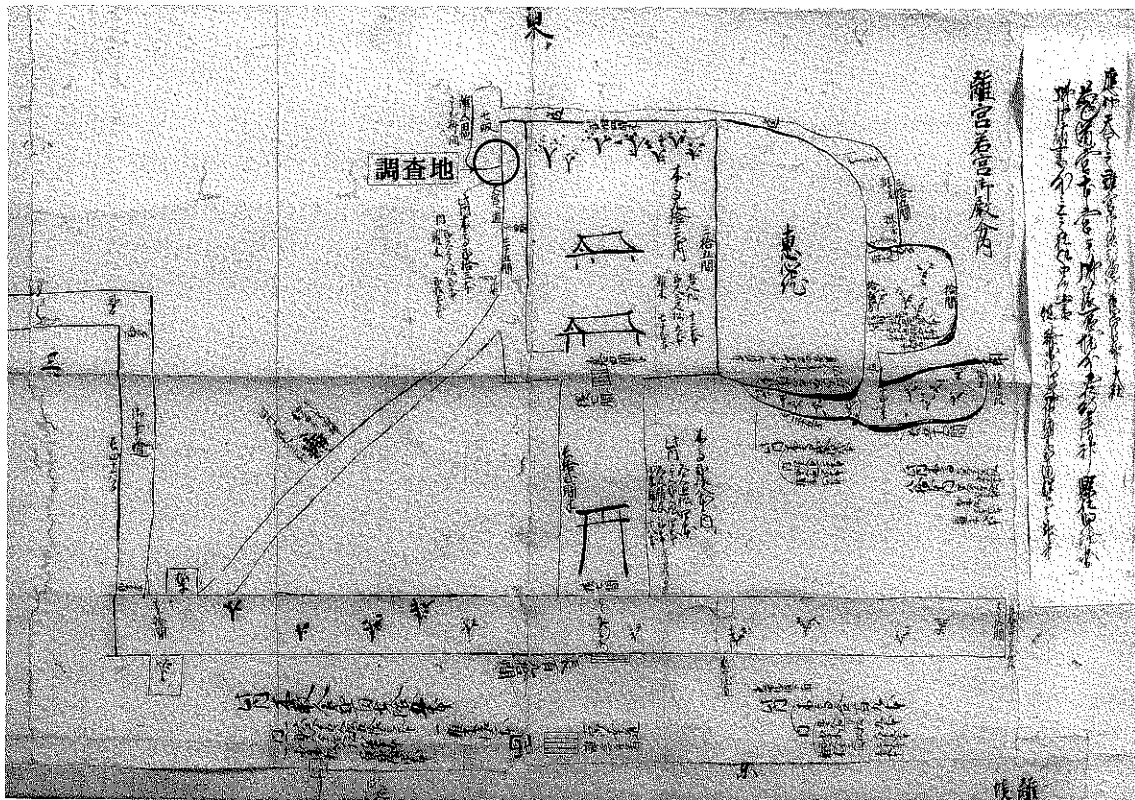
第10図 トレンチ北端遺構（石敷傾斜部）検出状況…南から

IV. ま と め

前章までに、今回の調査の経過及びその概要について報告した。調査面積が小規模であるため検出遺構の全体像を認識するには、限界性を認めるざるを得ないが、ここでは周辺の地形ならびに文献資料等から遺構の性格について考えてみたい。

A. 遺構の性格

前述したように、宇治上神社参道の北側には、参道に沿うように細長い谷が存在した。今回調査地は、位置的には谷底付近にあたと考えられる。このことを踏まえ、遺構の性格を考えていく上で注目したい資料に、宇治神社所蔵の『宇治神社境内古絵図』（第10図）と「桐原水」がある。古絵図は、宇治神社の領地を表記したもので、延宝6年（1677）に作成されたものである。この古絵図からは江戸中期の調査地周辺の状況を知りうる格好の資料である。古絵図によれば、調査地東側には長形状の枠が描かれており、その横に「離宮田地さうち料開」との記載がある。したがってこの枠が示すのは、宇治神社所有の水田の範囲と理解される。さらに古絵図をみていくと、宇治上神社参道が、北西に屈曲する地点に、「ミたらい」と記されているのがわかる。「ミたらい」とは手洗い場である。現在参道北沿いに



第11図 宇治神社境内古絵図（○部分が調査地）

は側溝が流れ、「ミたらい」標記付近の側溝では、今も野菜を洗う等頻繁に利用している。この側溝を流れる水源が宇治上神社境内に湧き出る「桐原水」である。古絵図には記されないが、「ミたらい」と当時の地形状況等から考えて、おそらく古絵図が描かれる江戸中期では、「桐原水」は現在とほぼ同様の位置を流れ宇治川へ注ぎ込んでいたと想定される。次に今回検出した遺構の性格を考える参考遺跡に平等院庭園と滋賀県中主町の兵主神社庭園、そして岩手県平泉町の無量光院跡をあげておきたい。

平等院は、現在鳳凰堂の建つ中島部分の復元整備を実施しており、昨年度は鳳凰堂北翼廊背後の中島・園池部分を調査し、創建期から現代までに6つの変遷を確認している²⁾。ここで注目したいのは創建期の状況についてである。創建期の庭園(第10図)は、調査以前では想像もできなかった意匠をしたものであった。堂際から下降する石敷が、一旦平坦な石敷になり、この石敷平坦面先端で屈曲する汀線を構成する池底にも石を貼り、その比高は40cm程でほとんどなかった。その結果、北翼廊背後の園池部分はその状況から尾廊から注ぐ流れを形成した庭園であることが理解できるようになった。

兵主大社庭園は、これまでの発掘調査によって水の流れを強く意識した構造の庭園であると考えられ、すなわち導水溝(遺水)、園池、排水溝の一連の中で一つの流れを形成している³⁾ということが判明してきた。平等院庭園とともに“流れ”が重要視されているようである。



第12図 平等院庭園の流れ(北から)…平成6年度調査

無量光院跡は奥州藤原三代の秀衡によって創建されたといわれる寺院跡である。これまで本堂(阿弥陀堂)部分と中島とを発掘調査しており、建物の配置や規模などが明らかとなっている。特に阿弥陀堂の平面プランが平等院鳳凰堂のそれと類似しているのは余りにも有名である。本堂・中島を巡る池は、池の形を留めたまま水田として利用されている。こういったように池が水田化する事例は非常に多いようである。

以上の諸種の事例と発掘調査データから推測すると、古絵図にみられる水田は池跡であり、検出した礫敷傾斜部は池の汀と考えられる。池の

水は「桐原水」より引き込まれる。礫敷平坦部は、この池の水を宇治川に流すための導水路である。礫が平坦に配置されている状況は、おそらく浅瀬を表現したものと考えられる。今回発見した遺構は、おそらく桐原水を源として宇治川へと注ぐその流れを利用して作庭された庭園遺構と想定しておきたい。

B. 庭園遺構の時期

今回検出した庭園遺構の年代については、土器等の年代が特定できる遺物がみられないことから明らかにはできな

| | |
|------------|---|
| 長治元 (1104) | 藤原忠実が宇治離宮社に神馬を献じ、また、平等院釣殿で競馬を見物、この日、別業富家殿に宿泊する。 (殿曆) |
| 天永元 (1110) | 藤原忠実が成信坊棧敷で離宮祭を見物する。 (殿曆) |
| 天永3 (1112) | 宇治離宮祭が行われ、恒例により藤原忠実政所より幣を送付する。 (殿曆) |
| 永久4 (1116) | 藤原忠実が成信坊棧敷で離宮祭を見物する。 (殿曆) |
| 長承2 (1133) | 宇治離宮祭が行われ、田楽・猿楽などが参加し、数千人が見物したといわれ、また槇島・宇治辺の住人により競馬が奉仕される (中右記) |
| 長承3 (1134) | 今年より離宮祭の行列が小川殿門前を通過し、盛況を呈する。祭礼ののち、藤原宗忠が宇治川に螢火を見る。 (中右記) |
| 仁平3 (1153) | 宇治離宮祭に奉仕する「宇治白川等座々法師原」60余人に藤原忠実より田楽装束が与えられる。 (兵範記) |
| 文治2 (1186) | 藤原公守が宇治離宮の射笠懸で落馬し、それがもとで11日に死去する。 (玉葉) 九条兼実が数年間欠如していた宇治離宮祭使を旧例に復し、祇園神人に勤仕させる。 (玉葉) |

第13図 平安期における離宮祭関係記事

いが、概ね平安期～鎌倉前半期にかけての作庭手法に類似すると思われる。

次に離宮祭についてみてみたい。今回調査地周辺には前述したように宇治上神社・宇治神社の両社が鎮守する。古くは両社は「離宮社」と呼ばれていた。平安期の離宮社では「離宮祭」と呼ばれる祭りが度々催されていたことが、文献資料から窺い知ることができる(第12図)。離宮祭の初見は、長治元年(1104)で藤原忠実が宇治離宮に神馬を献じたとある。その後の平安期における離宮祭関係の記事は、この忠実が大半を占めている。藤原忠実(1078～1162)は平等院を創建した藤原頼通の曾孫にあたる。時は道長・頼通による藤原氏摂関全盛時代が終りを告げ、鳥羽・白河両上皇による院政が強固に貫かれた時代に入っていた。院政の権力が増大する中で、失墜し始める摂関家の勢力を再興させるために忠実は奮闘するが、しだいに院政側との関係を悪化させ、保安元年(1120)内覧を停止される大事件を起こしている。

平等院でも、忠実に関係する注目すべき記事がある。『殿曆』康和3年(1101)の関白藤原忠実の平等院修理の沙汰である。この時、法成寺も同じく修理の沙汰がなされている。平等院の発掘調査で出土する大半の瓦は河内系瓦である⁴⁾。これらの瓦群は忠実の平等院修理の際に使用されたものと考えられている。瓦の出土状況から考えてかなり大規模な修理であったようである。この河内系瓦は平等院だけではなく、平安期宇治の主要寺院である浄妙寺や

白川金色院・三室戸寺そして宇治市街遺跡から出土しており、平安後期の宇治を特徴づける瓦といえる。

河内系瓦を出土する平等院・宇治市街遺跡については、忠実の頃に平等院を核とした街区整備が成されていったと考えられている⁵⁾。離宮祭、そして平等院を核とする街区整備等の問題を考えると、あくまでも憶測と希望にしかすぎないかもしれないが、今回出土した庭園遺構は、これら一連の関係のもとで忠実によって作庭されたと考えられないであろうか。平等院周辺だけではなく宇治川谷口部分全体が整備されたとも思えるのである。

C. おわりに

今回の発掘調査の成果については、以上述べてきたとおりである。小面積の調査であり、想定した遺構の性格の当否は今後の調査に委ねるしかないが、ほとんど調査がなかった宇治川右岸で、遺構の存在が確認されたことそのものが今回の調査では重要な成果といえ、今後の周辺調査に期待するものである。

最後に発掘調査にご協力いただいた関係期間・関係各位に対して心よりお礼を申し上げ本報告の結びとしたい。

註)

- 1) 杉本宏「瓦師源左衛門と棧瓦」『京都考古』第71号 1994
- 2) 「平成6年度平等院庭園保存整備に伴う発掘調査の成果」現地説明会資料 宇治市教育委員会 1994
- 3) 河合順之「神、降るシマー名勝兵主神社庭園」『八千矛』第16号 1995
- 4) 杉本宏「平等院古瓦の新相－河内系軒瓦の様相・年代・背景」『平安京歴史研究－杉山信三先生米寿記念論集－』1994
- 5) 杉本宏「宇治橋架橋位置変更と宇治街区の成立」『平等院旧境内多宝塔推定地第1次発掘調査概報』宇治市教育委員会 1994

E. 西隼上り遺跡発掘調査概要

(菟道藪里26他)